
星の使徒 ~ ヨハネの大冒険 ~

円入健策

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星の使徒 ～ヨハネの大冒険～

【Nコード】

N2779Z

【作者名】

円入健策

【あらすじ】

はるか昔、優雅に暮らす古代人達の目の前に一人の男が現れた。その男は滅亡の使者と名乗り、人々を次から次へと滅ぼしていった。人間のみならず、生きとし生けるもの全てを根絶やしにするのであった。

それを阻止するべく立ち向かう勇士がいた。若者は神に試練を望んだ。厳しい試練を乗り越えた若者は神に近い強靱な肉体と精神を手に入れた。さらに、神は『七星剣』という神器を創造し、若者に森羅万象を操る力を授けた。

精錬された心身と、七星剣により、見事に滅亡の使者を打ち倒した。再び世界に平和が戻り、世に光が差し込んできた。若者は神に与えられた力に恐怖し、七星剣と共に封印するのであった。

それから時は流れ、現代。文明は発展し、世にロボット工学が広まる時代。人々が豊かな生活を送っているなか、再び滅亡の使者の産声が上がった。

その危機を察知するかのように、考古学者ウィリアムは封印された七星剣を探し出し、息子であるヨハネに十八歳の誕生日プレゼントとして与えるのであった。

幼少時代に極度のいじめに遭ったヨハネは自分の部屋に引きこもり、親の顔も見ないまま、十八歳を迎えようとしていた。父親から七星剣を授かった日の夜、夢の中で美しい女性に出会い、一目惚れをした。女性は「愛しき人よ。貴方に逢いたい。私を探してくれませんか・・・？」と言い、消えてしまった。

明くる次の日、ヨハネは飛び起きて、夢で出会った女性を探すため、輝きを失っていた目に希望の光をとらせながら、無限に広がる世界へ飛び出して行くのであった。

プロローグ

《プロローグ》

イギリス。人里離れた自然の中に、ひとつの豪邸が居座っている。そこには一人の青年が住んでいた。その名はヨハネ・アレクサンドロス。

彼は幼少時代、ひとなつつこい性格の持ち主であったが、品格や容姿などで特別扱いされ、ひどい虐めを受けた。

そのためか、無感情になり、口が利けない状態に陥ってしまったのだ。

ヨハネの父親、ウイリアムは『古代魔道考古学者』でありながら、ポラリス魔術学園の教師でもあった。

旅と研究を重ねる日々が多く、家族と共に過ごす時間がすくなく、なかなか我が子を愛することができなかった。

ヨハネは自分の部屋にこもる生活をしつづけ、食事を取る時にしか扉を開かず、

母親の顔を見ることはなかった……。

七月七日。ヨハネは誕生日を迎える。

十八歳になる彼に父親からの誕生日プレゼントが届いた。

扉の向こうから母親の声がある。

「ヨハネ、お父さんから誕生日プレゼントが来ていますよ。部屋の扉の前にプレゼントが置かれた。」

去っていく足音が聞こえなくなるのを確かめて、

ヨハネは読みかけの古びた本を閉じた。

静かに扉をあけてひよっこりと顔をだす。

誰もいないことを確認したヨハネは、プレゼントを抱き寄せる。

部屋の中までプレゼントを持ってくると、静かに扉を閉めた。華やかなラッピングを破れないように丁寧にあける。中から取り出したものは……

まるで星のような輝きを発し、流れるような剣。

長さは足元から腰の高さまでである。

箱の中にはもう一つ、メッセージカードが挟まっていた。

ヨハネは手に取り読んでみた。

誕生日おめでとう。今年も逢うことが

できないのが残念でしかたがない。

せめて……十八歳の記念として、

家宝である七星剣をヨハネに託す。

この剣のように、光り輝く星のように、

明るいヨハネになって欲しい……

そう願っているよ。

愛している我が子へ……

父より。

無表情で剣を抱きしめるヨハネ。しばらくすると、いつもの夜がやって来た。

ヨハネは眠りについた。

夢の中……。

闇の中からまばゆい光が差し込み、どこからか女性の声がある。

「愛しき者よ……。あなたに逢いたい……。私を探してくれ

ませんか……？」

ヨハネは耳をすませて声をたどりながら、ゆっくりと歩き出した。

「愛しきものよ……。」

女性の声がかすかにしか聞こえなくなったとき、

ヨハネは何かの祭壇へたどり着いていた……。

そこには光に包まれた一人の美しい女性がヨハネを待っていた。眩い光がやがて、柔らかな光へと変わり、女性の顔がハッキリと見えてくる。

どこかで逢ったかのような、そうでないような、そんな感じだった。

ヨハネは彼女に一目ぼれをしてしまった。

彼女は、「あなたの歩むその道に、私はいます……。」と言いつ残した瞬間、

ヨハネは目を覚ました。

カーテンの隙間から朝日がもれている。

ヨハネは飛び起きて、お風呂に入り、父のお古でおめかしをして、七星剣を手に取り、何年間も一緒だった薄暗い部屋から飛び出していた。

近くにいた執事が目をひんむき驚く。

しかし、そうなることを知っていたかのように、小声でつぶやいた。

「ヨハネ様……。頑張ってください……。」

第一章 怒りを背にして

《第一章》 怒りを背にして

元気よく缶詰の中から飛び出したヨハネではあったが、一体、どこに向かえばいいのか全くわからない。木々が生い茂る車道。東か西、どちらへ向かおうか……。通り過ぎる黒く美しい馬車のひづめの音が走るだけ。

静けさがたちこむ中、一人の女の子が歩いている。

ヨハネと同じ年くらい。陽気な顔立ち。美しい栗色のロングヘアをなびかせている。

女の子は、木々のように棒立ちして考えているヨハネを見つけ、声をかけた。

（あれ？・・・あの人、もしかしてヨハネくんかなあ・・・？間違いないわ！）

「ヨハネくん！」

ヨハネは呼びかけてくる女の子に気が付いた。

どう接すればいいのか分からず、困った顔を表す。女の子は手を振って走り寄って来た。

ドスンッ！

小石でつまずいた女の子は、バランスを崩してしまい、ヨハネに倒れ込んだ。

一緒に地面に転んだヨハネは尻餅をつく。

「いったあゝい……。あ、ごめんなさい！私のせいで……。」「ヨハネは無反応。なぜなら、昨夜、夢の中に出てきた女性ではな

いかと考えているところだからだ。

どこかが違う……。全くの別人だ。でも、懐かしい感じがする。女の子は立ち上がり、服についたホコリをポンポンと手で落とす。

ヨハネに手を差し伸べて言った。

「だいじょうぶ？」

ヨハネは女の子の手に触れず、自力で立ち上がった。女の子は自分を思い出してもらおうとむかし話をする。

「ヨハネくん、私のことを覚えてないかな？ マリアだよ？」

小さい時、一緒に学校に行ったよね。覚えてなかったかな……？」

無表情で首をかしげるヨハネ。無理もない。ちょうどその頃にいじめに遭い、

激しいストレスで記憶をなくしているからだ。マリアは微笑む。

「そつかあ。あれから全く逢ってないもんね！ しょうがないよね、えへへ。」

そうだ、せっかく久しぶりに逢ったから、一緒にどこかへお茶しにいかない？」

ヨハネはうなずく。

「キマリだね！ とつても美味しいお菓子のお店があるんだ。」

ヨハネくんだけに特別、教えちゃうよ！」

マリアは強引にヨハネの手を握って、カフェへ向かった。

それを三人の男の子達が、木々に隠れて様子を見ていた。

彼らは幼少時代、ヨハネをいじめ続けてきたロックとカートとペイパー。

小悪魔トリオと世間で名が通っており、イタズラと酷い虐めが大好きなのである。

カートがロックに言った。

「なあなあ、あいつヨハネなんじゃねー？」 ペイパーが便乗して、

「ほほへ、あの生意気な感じ、絶対あいっただぜ。ふへへ。」
「そうみたいだなあ。へえ。まだ生きていたのか。」
「ちょうど暇だ。あの奴、マリアとデートに行きやがって・・・
ムカつくな。邪魔しに行こうぜ。」
「ロックたちはヨハネとマリアに気づかれないうちに後を追っていた。」

歩いて五分が経っただろうか、ヨハネとマリアはカフェに辿り着いた。

森林浴をテーマとしてつくられたカフェで、
小鳥のさえずりと、川のせせらぎの音色が心を和ませる。
木とツルの洒落た椅子に腰をかけるヨハネとマリア。
「いらっしやいませ」とメイドがやってきた。

マリアはメニューを見ながら、
「なににしようかなあ。ヨハネくんは何にする？」と聞いてみた。

しかし、ヨハネはマリアの質問をそっちのけに、周りの美しい景色に見とれていた。

マリアは純粹なヨハネの心に思わず、微笑みを返した。

「うーんと、グリーンブッシュドノエルとカプチーノ2つください。
あい。」

メイドは注文を受け付け、頭を下げて行った。

マリアはヨハネが手に持っている七星剣に気がついた。

「ねえねえ、それすごいね！本物の？」

話しかけるマリアに気づくヨハネ。ポケットから父親のメッセージカードを取り出し、

無言でマリアに手渡した。

「いいなあ。誕生日プレゼントだったんだあ。」

家宝だなんて、私の家には無いから、羨ましいなあ。」

話のさなか、注文していたものがやってきた。マリアは目を輝か

せながら、

「見て〜、かわいい〜！食べちゃうのがもつたないね！」と言
い、

マリアはフォークを手にし、少しとってヨハネに食べさせる。

「はい、あ〜んして。食べさせてあげる〜。」

ヨハネは無表情のままであったが、小さい頃、お母さんに食べさ
せてもらっていた

記憶がよみがえり、自然と口をもっていった。

まるで母親のように「おいしい？」とマリアが聞くとヨハネはう
なずいた。

それを見ていたトリオは我慢ならなかった。ロックは悪知恵を働
かせ、嫌がらせを思いついた。

「なあ、お前ら。いま火山活動している山を知ってるか？」

それに答えてペイパーは「うえへ、ゲブラ火山のことか？」

「そうだ。あそこはいま、立ち入り禁止令が出されていてな、危
険な所になってんだよ。」

火山のふもとに洞窟があつて、そこには熱い溶岩が溢れかえっ
ているのさ。

そこにヨハネをおびき寄せて閉じ込めるんだ。」

それを聞いたカートは身震いを起こしながら、

「オレ……聞いた事がある。あそこには邪悪な龍が棲んでい
て、

食べられちゃうって話を……。なあ、ロック、やめとこうぜ。」

「何馬鹿な事いつてんだよ。せつかくの楽しみを台無しにする気
か？

俺様もその話は知っているがよ、伝説にすぎないんだぜ。」

ロックは計画した内容を話す。

「いいか？ヨハネがトイレに行った時、お前たちがマリアをさら

うんだ。

戻ったヨハネに、『マリアが家に帰った』って俺が言うから、その通りにするんだぜ?」

カートとペイパーはうなずいた。

それから少し時間が経って、ヨハネは席を立ち、お手洗いへ向かっていった。

いまだ!とカートとペイパーはマリアの前に飛び出した。

「あなたたち・・・、何でここにいるの?またヨハネをいじめるつもりなの?!」

カートは言った。

「ふんっ、ちょっと来てもらおうか?」

そういいながら、マリアの口を手で塞ぎ、腕を強くにぎり、抵抗するマリアを引っ張った。

ペイパーは残っているブッシュドノエルをわしづかみにし、大きな口の中に放り込んだ。

それを見たカートはイライラして、

「おい、なに食ってんだよ。手伝ってくれよ!」

と言いながら、二人はマリアを連れて去って行ってしまった。

その直後にヨハネは戻ってきた。席に戻ると、マリアが座っていた椅子にロツクが腰掛けている。

ニヤついているロツクはヨハネに言った。

「マリアを探してんのか?お前が戻るのが遅すぎて先に帰って行っちまっただぜ?」

ヨハネはロツクの顔を見て、昔の記憶が掘り起こされて心をえぐられる、そんな気分になった。

「アイツの家、知らないだろ?俺は知ってるぜ。ついてくるか?」
「罾とも知らずにヨハネはうなずいた。ロツクは自分の車にヨハネを乗せてゲブラ火山へ向かった。」

硫黄の臭いが立ち込める。ヨハネは何か変だと気づいたがその時すでにもう遅い。

ロックは車を止めて、上着の裏のポケットにしまっていたエアガンを手に取り、

ヨハネに銃口を向けて言った。

「死にたくなきゃついてこいよ。」

二人は車を降りて、洞窟に向かって歩き出した。

山道だったが、人が歩けるくらいの整備は施されている。

それから十分くらい歩いただろうか、ようやく洞窟の入り口までたどり着いた。

そこは以前、天然の宝石や石炭が良く採れる鉱山であったが、とある落盤事故により、

危険な場所になってしまい、今は国からの禁止令により立ち入りが出来ない。

洞窟の入り口には大きな鉄の扉がついている。

先に着いていたカートとペイパーは待ちくたびれていた。

ロックはヨハネの背中のシャツを握り、前に押し出すかのように、重い扉の前まで歩かせた。

ペイパーはヨハネが持っていた剣を見て、

「うえへへ、何だこの剣。王子のつもりか？」

ふはは、よこしなよそれ。骨董屋に売ってやるからよ。へへへ。

「ロックはそれを聞いて、

「そんなガラクタなんか売れねえよ。こんなおもちゃ持ち歩いて、何歳でちゆか？」

ああそうか、ここはな、龍がいるという伝説があるらしいんだよ。」

そういいながら、ヨハネを洞窟の中へ突き飛ばした。

「そこで死ぬまでダンジョンごっこでもしてるよ。じゃあな！」
カートとペイパーは重たい扉を閉め、鍵をかけた。内側からでは

開けることが出来ない。

ヨハネは閉じ込められたことに気が付き、扉を叩くが反応がない。トリオは馬鹿笑いをしている。どうすればいいのか分からない。ただ呆然と立っているヨハネ。明かりさえない、真つ暗な世界。空気も薄い。

ヨハネの心は何か鋭い針に刺されているような痛みを感じた・・・。

その時である。手に持っていた七星剣から、優しい光が彼を照らした。

ヨハネはふと思った。この先に進もう。そこには何かがある。七星剣から出る光を頼りに、ヨハネは洞窟の奥へと進んでいった。進むにつれ、気温が高くなって来るのをチリチリと肌で感じとれる。

大広間に入った。何かの入り口だろうか。壁には人工的に彫られた模様が一面に渡り、

地面には古代文字が刻まれている。

ヨハネの身長のご二倍ぐらいの石像が両端に一体ずつ存在している。七星剣の光をかざしてよく見ると、今にも襲い掛かってくるような恐ろしい龍の石像であった。

ヨハネはさらに奥へ進んでゆく。

熱風が差し込む。呼吸することすら難しい。それでも突き進んでゆく。

足場は三人分ぐらいの幅で崖となっており、下にはマグマが溜まっている。

落つこちらは一環の終わりだ。洞窟内は延々と燃え続けるタイマツによって

辺りは照らし出されている。所々に蝙蝠がぶら下がっている。

ヨハネは剣を構えて警戒するが、コウモリは静かに眠っているよ

うだ。

おそらく最奥だろうか、祭壇らしき場所へたどり着いた。
熱い……。目が焼けそうだ。肺が燃えるような感じもする。

この祭壇、何処かで見覚えがある……。そうだ、夢で見た舞台
にそっくりではないか。

「……………?!」

ヨハネはびっくりした。マリアが立っているではないか。マリア
はヨハネに気づいた。

「ヨハネくん、助けにきてくれたの？ごめんなさい。

私が捕まってしまったせいで、こんな事になってしまっ……
。

閉じ込められて、どうしたらいいのか分からなくてここまで来
ちゃった……。てへへ。」

こんな厳しい状況にも、マリアはヨハネに笑顔をみせる。

グワアアアアアアア!!

何かのうなり声が上から聞こえてくる……。ヨハネはマリアを
かばった。

声の方向を見上げるとそこには、真っ赤に燃え盛るようなドラゴ
ンがいるではないか!

マリアは目の前の事実が信じられず、開いた口がふさがらない。

ドラゴンは心臓をえぐるかのような睨みを利かせる目で、

ヨハネの顔を見ながら、耳をつんざく咆哮を繰り返す。

ギエアアアアアアア!!

何かしゃべっている……。ヨハネにはわかった。ドラゴンは言
う。

「まさか・・・、後継者が再びこの世に生まれ出るとは・・・。世界の危機が迫っているという事が・・・。」

目覚めたばかりではあるが、まあ良い。

生命の進化の起源、魂の浄化たる炎の宝玉、

貴様にふさわしいかどうか、試させてもらおう・・・！」

ドラゴンが口を閉じた瞬間、大きな翼をもってヨハネの近くに寄ってきた！

熱風が吹き荒れる。猛烈に暑い風が押し寄せ、ヨハネは腕で顔を隠す。

剣を構えて警戒する。ドラゴンは手始めに口から炎の塊を吐き出し、攻撃をしかけてきた！

剣を盾のようにガードしてうまく受け流す。その時だ。ヨハネは初めてマリアに口を開いた。

「僕がこいつを倒す。マリアは安全な場所に逃げて。」

「う、うん・・・」マリアは石柱に身を隠し、心配そうにヨハネを見守る。

次に、ドラゴンは太い尻尾でヨハネの足元を攻撃する！ヨハネはジャンプしてうまくかわす。

ドラゴンは再びヨハネに話しかけた。

「その身のこなし、剣術での防御・・・。奴に似ておる・・・。」

若造にしてはやるようだな・・・。だがこれは逃げ切れまい・・・。」

ドラゴンは防御にはいった。精神を集中し、古代の言葉を口ずさんでいる。

ヨハネはドラゴンに斬りかかるが、鋼鉄のような固いうろこは傷一つ付けられない。

ドラゴンが古代語の詠唱を終えた瞬間！ヨハネの目の前に溶岩の塊が出現した！

危険と察知したヨハネはドラゴンの後ろに回りこんだ。その溶岩の塊は爆発した！

我々、ドラゴンと共に封印したのだ……。

よいか、ヨハネよ……。この美しい生命の星を滅ぼそうと試みる、滅亡の使者が再誕した。

貴様は世界をめぐり、我の仲間に出会い、宝玉を集めるのだ……。

幾多の苦痛を味わうかも知れぬが……、どうか……、この世界を救って欲しい……。

頼んだぞ……。」

そういうと、ドラゴンは口を開き、宝玉を舌の上に転ばせた。

ヨハネは火の宝玉を手に入れた！ドラゴンは続けて語る。

「貴様の力……、見事であった……。私はしばらく眠りにつくでしょう……。」

ドラゴンは体をよろめかせながら、大きな翼をはばたかせ、去っていった……。

無事に決着がついたヨハネにマリアが駆け寄ってきた。

「ヨハネくん……、大丈夫……？ ヤケド……してるみたい。」

「このくらい平気だ。」

「よかった……。ありがとう……。」

マリアはヨハネに体を寄せた。だが、ヨハネはマリアを抱きしめようとはしなかった。

火の宝玉を手を持ったヨハネは、この灼熱の地獄を鎮めるため、念を込めながら竜言語で呪文を唱え、火山の活動をとめた。

「これは……ヨハネくんのちから……？ すごい！」

みるみるうちに洞窟の温度が下がり、ようやく人が住めるくらいの環境にまで定まった。

「さあ、帰ろうか……。」

二人は歩いて洞窟を出る……。

あの洞窟の重い扉の前にたどり着いた。やはり扉は動かない。

ヨハネは火の宝玉の力を引き出し、分厚い鉄の扉を溶かした。度肝を抜かしたトリオの顔が見えてくる。

「な、何が起きたんだ……？扉が無くなってしまったぞ?!」
ヨハネは素早い動きでロツクの首に七星剣の刃を突き付けた。

「よくもマリアをあんな目に合わせたな……。許さない。」

宝玉の力のせいだろうか、ヨハネの感情に怒りが立ち込めてくる。ロツクは両手を上げ、怖気ついている。

「わ、悪かった、もう二度としない……。」

ヨハネは剣を控えようとはしない。猛烈な怒りと蘇るあのころの虐めの記憶により、

抑えきれない状況であった。そう……。まるで灼熱の炎のように。

「だめだよ……。」

……。そつと、マリアの手がヨハネの腕にふれた。

マリアはヨハネをなだめるかのように言葉を掛けた。

「この三人のしてきた事はとても罪深いことだわ……。私も許せない。」

でも、ヨハネくんがこの人たちを殺してしまったら、

ヨハネくんもそれ以上の罪を背負ってしまうわ。そんなの私はイヤだよ……。

もとのヨハネくんに戻って欲しい……!」

マリアはヨハネの頬にキスをした……。

その瞬間、一気にヨハネの心は覚めて、我を取り戻した。

突き付けていた七星剣をゆっくりと下げてゆく。

トリオは絶叫しながら何処かへ逃げて行ってしまった。

「マリア……。ありがとう。」

マリアは少し涙をためながら、微笑んだ……。

第二章 災いの種

《第二章》 災いの種

夜もふけて、あたりはすっかり暗くなっており、帰る道もわからないほどであった。

二人は下山するために歩き出す。

しばらくすると二人は、月の光に怪しく照らされた林の中を歩いていた。

そんな状況の中、マリアはなにか心が落ち着かない様子だ。

ドラゴンとの戦いで勇ましいヨハネを見たマリアは、恋心を抱き始めたのだ。

何度もヨハネの手を握ろうと思えど、照れくさくて勇気が出ない。ヨハネの顔を見るたびに心臓の鼓動が早くなる。突然、ヨハネは話しかける。

「大丈夫か？あれから長く歩いているが、疲れてないか？」

その言葉と同時にマリアはびっくりする。

「う、うん……。大丈夫だよ。し……。心配してくれて有難う。」

声が震えるマリア。

追い討ちをかけるかのように、次第に霧もかかり、濃くなってゆく。

足元に気をつけながら一歩ずつ前に進んでゆく。

ヨハネは火の宝玉を取り出し、あたりの霧の水分を蒸発させ、視界をさえぎる霧をかき消した。

マリアは自分の今の気持ちを伝えるため、ヨハネに心を打ち明けようと口を開いた。

「わ……。わたしね、ヨハネくんのが……。すき、

カー！カー！

突然、カラスたちの鳴き声が響きわたる。

「何かいったか？」

「う、ううん、なんでもないよ。」

マリアは気持ちを伝えることができず、ただ時が過ぎるばかり。

どれくらい歩いただろうか。空腹がせまり、足も棒になってきた。

二人が休憩をしようと思ったとき、朝日が差し込み、

ちやうど見晴らしの良い高台に着いていた。

遠くにはロンドンの町並みが眺められる。

ロマンチックな瞬間。まるで朝日が二人を祝福しているかのようだ。

ヨハネは地面に七星剣を突き立てて言った。

「街まで後もう少しだな。」

マリアはヨハネの横顔を見ながら、腕を組もうとした。

寄り添おうと思った時、ヨハネの無表情な顔を見て、マリアはふと思う。

（こんなに近くにいるのに、なにも抵抗するそぶりなんて無いのに……、

なぜか……、わたしとの間に見えない厚い壁があるみたい……）

マリアは目をつむり、深呼吸を三回ほどしたあと、心を入れ替えた。

「ヨハネくん、」

景色に見とれていたヨハネはマリアに振り向いた。

「わたし、またヨハネくんにあえてとても嬉しかったよ。」

大変な事もあったけれど、楽しかった！これからも旅をするんだよね……。

私も一緒に行きたい……。でも、行けないの……。

だからね、この思い出を大切にしたい……。」

そういいながら、マリアは大事そうにしているサファイアのタリスマンを外し、

ヨハネの首にかけてあげた。

「これは……?」

「私の大切なお守りだよ。旅の途中、さびしくなったらこれを見てね!」

「……ありがとう。大事にする。」

マリアは微笑んだ。その時のマリアの笑顔は朝日よりも眩しかった。

「かえろっ!」

そういって二人は街のほうへと歩き出した。

二人が再会した並木の大通り。そこで別れの挨拶をした。

「ヨハネくんが旅から帰ってきたら、お話聞かせてね!楽しみにしてるよ!」

マリアはヨハネの手を包み込んで、

「私はずっとヨハネくんの無事を祈ってる。一人じゃないからね。」

「ああ、ありがとう。」

ヨハネはこのとき、初めて固い無表情の顔が少し緩んだ。

「それじゃあ、またね!」

そういって挨拶して、マリアは名残惜しそうにしながらも歩いて帰っていった……。

一人になったヨハネは一度、家に戻ることにした。

高貴な門を通り抜けた先には、美しい噴水が見える。

光の反射で虹がうつしだされている。

一匹の大人のゴールドエンリトルバーが元氣よく迎えてくれた。

花壇に水を与えていた六十歳くらいのメイドがヨハネに気づき、近づいてきた。

「あら！ヨハネ坊ちゃま、帰ってこられたのですね。」

「まあ……どうしたのですか？服が焼けて……ボロボロではありませんか……。」

「すぐにお湯の準備を致しますから、お入りになられてください。」

「メイドは慌てて浴室のほうへと飛んでいった。」

エントランスの広い階段を上り、渡り廊下に差し掛かったところに、執事が待っていた。

「これはヨハネ坊ちゃま、ご無事にお戻りになられて何よりです。たつた今、メイドから話を伺いました。大変でしたでしょう。」

「ごゆつくりとお休みになられてください。」

「そう言い、ヨハネと一緒に浴室の方へ向かった。」

ヨハネはお風呂に入り、気品あふれる衣装をまとい、食事をとるためにリビングへ。

大きなテーブルにはすでに豪華な料理が華やかに並んでいた。

ヨハネは椅子に腰をかけ、食事を始めた。途中、執事が話しを持ちかける。

「見事に火の宝玉を手に入れる事ができたようで、大変嬉しく思っています。」

「さつそくで失礼ではございますが、こんな話を旦那様からお聞きしております。」

「少々長くなりますが、お聞きなさいますか？」

「ああ、話してくれ。」

「旦那様のご友人は港の貿易商人でありまして、大変顔が広いお方であると有名です。」

「彼の話によりますと、スペインの近くにアトランティスと呼ばれる沈んだ島があり、」

そこには古代人の都があるといます。神々を祭った神殿に、『ディープブルー』と呼ばれる宝石が眠っている。

伝えられており、その宝石を手にしたものは海を支配したのも同然。

そればかりでなく、水を自在に操る力を授かると言われております。

私目はもしかしたら、この『ディープブルー』は水の宝玉ではなからうかと……。

坊ちやまはどう思われますか？」

ヨハネは答えた。

「ディープブルーは伝説上のモノ。本当に水の宝玉なのかは解らない。

でも、何もしないより、行ってみる価値はあると思う。僕は自分の目で確かめたい。」

執事は少々困った顔で、

「そうですね……。わかりました。旅客船の手配をしておきますが、

ですが……。問題がひとつございまして……。」

「何だい？」

「現地ではそのディープブルーをめぐる争いが起こっているらしいのです。」

間違いなく、巻き込まれることになるでしょう……。」

ヨハネは火の宝玉を手に取り、こういった。

「大丈夫だ。僕にはこの七星剣の力がついている。

ドラゴンとの勝負に打ち勝ち、宝玉を手にする時、ドラゴンに願いを頼まれた。

世界を助けて欲しいと。残りの宝玉を集めなければならないんだ。」

「そうでしたか……。坊ちやまには大きな宿命がおりのように

で……。

「承知しました。準備いたしました。明日にでも出発されますか？」

「ああ、そうする。頼んだよ。」

食事を終えたヨハネは自分の部屋へ戻っていった。

執事はアンティークな電話の受話器を手に取り、船の手配を行った。

翌日、出発するヨハネを多くのメイドが見送った。

まるで、国王が出陣するかのような、そんな雰囲気だ。執事は言う。

「ヨハネ坊ちゃま、わたくしは港までお供をして、お見送り致します。」

ヨハネと執事は馬車に乗り、港へ移動した。

それを偶然みていたマリアは影からヨハネの無事を祈っていた。

移動中、ヨハネは緊張していたのだろうか、一つも口を開かなかった。

豪邸を出発してから二時間くらい経過して、ようやく港に着いた。さわやかな潮風を感じ、地面に足を下ろす。

目の前には小型の旅客船が堂々と止められていた。鰲沢に貸しきりのようだ。執事は言う。

「必要であるうお荷物はすでに貨物室へ運んでおります。どうか……、ご無事で……。」

ヨハネはうなずいた。何もためらいもなく船に乗り込んだ。

船は大きな汽笛とともに、陸を離れた。

ヨハネは総支配人と出会い、部屋へ案内してもらった。

煌びやかな装飾。ゆったりとした空間。

目移りしている間に、いつのまにか部屋の扉の前に立っていた。

「どうぞ、ごゆっくり。」

そう言って総支配人は丁寧にお辞儀をした。

扉を開いたその中は、高級マンションの一部屋のようである。美しいバラがモチーフのスイート部屋である。

部屋に入った瞬間、ひときわ目立つ大きな窓が印象深い。壮大な海の景色が見える。

ヨハネはゆり椅子を窓際に持って来て座り、ひじをついてくつろいだ。

あつという間に日が暮れ、いつの間にか眠っていたヨハネは目を覚まし、

気晴らしに船外へ出る。

波の音、潮の香り、冷たい風。それらを肌で感じながら、思い切り背伸びをした。

すこし間を気遣っていた総支配人が、ヨハネの元に近づいた。

「お食事の準備が出来ましたので、お召し上がりになられてください。」

ヨハネは客室に戻ることにした。

操縦席。副船長が足を組んで少し横着な姿勢でレーダーを監視している。

数分してから、なにやらレーダーに反応が。

副船長は大きな口であくびをしながら、レーダーをチェックしている。

「ふあゝ。んゝ・・・？ぬあゝんか、変なのが映っていたようだあが・・・。」

「気のせいだよぬあゝ。あゝ・・・ねむい・・・。」

副船長はボーっとして、うとうととしていた。

そのころ、薄暗い貨物室には、何やら怪しげな動きが・・・。

ガサツ、ガタガタツ！

なにやら物音がする。なんと、荷物の中に人が紛れ込んでいないか。

コンテナから三人、ドラム缶から一人、旅行かばんからまた一人と次々に顔を出す。

そのうちの一人が小声で喋った。

「おい、お前たち。そろそろ準備の時間だ。早くしろ。」

その男は、美男子でウェーブのかかった空色のロングヘア、露出度の高いレザージャケット。

胸にはエメラルド色のバラのコサージュがつけられている。

小さい旅行カバンの中に入っていたモヒカンの男が口を開いた。

「なあ、兄貴？どうしてこの小型船にしたでやんすか？」

「あんたバカねえ。一番狙いやすいに決まってるでしょうが。」

無駄なおしゃべりはせずに、さっさと変装するのよ・・・！」

そう言いながら、五人は手際よく変装をした。兄貴と呼ばれた美

男子は船長の服に。

モヒカンの男は機関士に、スレンダーでお色気のたっぷりな女性は船医に。

ぼっちゃり系の男はレストランのコックに。

そして最後の一人である、ノツポの馬面男はバーテンダーに。

美男子は立てていた計画内容をもう一度確認させるため説明した。

「いいかい？お前たち。持ち場に着いたらそこを動くんじゃないわよ。」

三発の銃声が鳴ったとき、ゲームスタートよ？わかってるわよねっ。」

「へいっ！」

一同は返事をして作戦を開始した。

そのころヨハネはベッドに横たわり、仮眠をとっていた。
静かな時間……。波の音が心を和ませる……。

再び操縦室。若旦那的な存在である船長は、勇ましい顔をして部下に指示を出していた。

操縦席に座って様子をみる。背後から船長に化けた美男子が、帽子を深めにかぶり、

気味の悪い表情でやってきた。船長は美男子の気配を察知したが、振り向かずに命令した。

「今は大丈夫だ。お前は安全管理に当たってくれ。」
美男子はいきなり大声を上げる！

「Jugemos！ヒャッハー！」

その瞬間、美男子は青いバラの装飾銃を取り出し、船長に銃口を向けた！

それと同時に周りにいた航海士と副船長は、抵抗しようと襲いかかるうとしたが、

すぐさま状況を把握して、すぐに体の動きを止めた。美男子は舌打ちをする。

「チチチツ！抵抗したら船長を、う・つ・わ・よ！」
そついつと、銃を天井に向けて三回射撃した！

銃口を再び船長に向ける。美男子は副船長に命令する。
「船内放送を流すわ。マイクはどこよ？」

副船長は船内放送をつなげ、マイクを美男子に渡した。
一方、ヨハネは操縦室で起こっていることなど知らずに、のんびりとうつぶせ状態で、

火の宝玉をビー玉のように転がして遊んでいる。

火の宝玉の中には、赤い炎が揺らめいている。

・・・放送が流れてきた。

『はあ〜い、みなさん、気分はいかがでしょうか？』

ただ今よりこの船は〜・・・あたいたち、ブルーローズ海賊団が乗っ取った！！

妙な動きをすれば船長たちを殺すわよ〜。それじゃあまた後で放送流すわ〜。

恐怖の航海をお楽しみくださあ〜い。ヒヤハハ〜！！』

ダアーン！！

船内放送により銃声が響き渡り、放送は終了した。

ヨハネは飛び起きて、すぐさま七星剣と宝玉を手に取り、ゆっくり扉を開けて様子を伺い、そつと部屋から出て行った。

エントランスに出た。そこには船医に変身しているお色気女が見張りをしている。

ヨハネは自分の背丈くらいに荷物が積まれたキャリアを見つけ、ダンボールの中に七星剣を隠して、押しながら通り過ぎようとした。

ところが、お色気女に気付かれてしまい、近寄ってきて声をかけられてしまった！

「ちよつとキミ・・・、どこへ行くのかしら？」

セクシーな目線からそらすようにヨハネは、

「えっ・・・、ちよつとお手洗いへ・・・。」

そうするとお色気女は、

「あらそう・・・。調子が悪いのかしら？・・・診てあげましょ
うか？」

「い、いえ、結構です。」

「そう？・・・我慢できなくなったら、私のところに来て頂戴ね。」

そついい、投げキッスをして去っていった。
どうやら、船医としてなりきりすぎて、本来の目的を忘れてい
ようだ。

ヨハネはほつとため息をついた。

操縦室では、ぼつちやりな男が海賊団長と合流していた。

眉間にしわを寄せた団長は船長のこめかみに銃を突きつけたまま、
ぼつちやり男に怒鳴った。

「ちよつとあんた、なに持ち場を離れているの?! 計画を台無し
にしちゃうつもり?」

少しも動揺するそぶりをみせず、ぼつちやり男は答えた。

「レストランには誰もいなかったんだよーう。」

それどころかあゝ、観光客一人すら見かけないんだなあゝ。

見張る意味が無いからあ、兄貴の様子を見に來ただけなんだな

団長は船長に質問する。

「こ、これは一体どういうつもりなの? 乗客はいないの? こ、答
えなさいよ!」

「この船にはアレクサンドロス公、ご子息様であるヨハネ様一人
しか乗ってない。」

それより……、一体何のつもりでこの船をジャックしたんだ
?!」

「あら? そついいばまだ話していなかったわね。」

単純なことよ? この船を丸ごと頂戴するだけ。

乗っているあなたたちは、みんな海に吐きださせちゃうけどね。

ちなみにあたいは団長のエメラルド。

あつ、もつさよならするから自己紹介の意味なんてないわよね。

エメラルドはニヤニヤしながら、ぼつちやり男に命令した。

「マリモ?! 今からこいつらを海にポイしちゃうから、準備して

頂戴。

こいつらはサメの美味しいエサになってもらうわ。フッフー！

そうエメラルドが余裕を持って笑っていた、その時！

操縦室にヨハネが飛び込んできた！

七星剣を構えるヨハネ。エメラルドは突如現れたヨハネにびっくりした。

「だ、誰よあんた?!」

・・・あゝ。さっきこの脳みそガツチンコな船長さんが言っていたガキね。

分かっていると思うけど、抵抗したらこの船長さんを撃っちゃうわよ？

その物騒な剣を置いてもらおうかしら?」

ヨハネはその通りにして、慎重な態度で七星剣を床に置いた。

「マリモ、その剣を拾いな。こいつがおかしな行動を起こさないようにね。」

マリモはヨハネの険しい表情をみて、恐る恐る七星剣を拾った。

「うーっ、そんな怖い目で見ないでくれよー。兄貴の命令なんだよー。」

マリモが七星剣を奪い、興味津々に刀身を眺めているその時、

ピコーン!!

なにやら、レーダー探知機に反応が。それを見た副船長の顔が青ざめていた。

「・・・なっ!なんだこの巨大な生き物は・・・!船長!こちらに衝突してきます!」

「なんだと?!」

ドスーーーーーン!

まるでマグニチュード8くらいの地震が襲ってきたかのような衝撃！

回避命令する間もなかった。直後に機関室からの連絡が飛び込んでくる。

『船長！甲板に大きな穴が！このままじゃ船は沈んでしまいます！避難命令を！』

エメラルドは現状が把握できなかった。

「えっ？なに？いきなり何が起こったの？！」

「今の衝撃で甲板に穴が開いちまったらしい……。たった一撃でこのダメージ……。」

どうするんだ？貴様たちも逃げなきゃ、この船ごと沈んじまうぞ……？」

「クツ……！」

エメラルドは船内放送で団員に撤退することを命令した。

『聞くのよアンタたち！この船は沈むようだわ！ずらかるわよ！』

そういつてマイクを投げ捨てた。銃をしまい、船長を突き飛ばした。

エメラルドとマリモはあっという間に逃げ去ってしまった。七星剣は奪われたままだ。

船長はヨハネに言った。

「私たちは何とか脱出します。お気になさらずに、あいつ等を追ってください。」

「わかった！」

そういつとヨハネは走って行った。

逃げ足の速いエメラルドたち。なかなか追いつきそうにない。

デッキへたどり着いた時には、すでに彼らは救命ボートを海に広げ、飛び乗っていた。

次第にエメラルドたちの乗っているボートは遠ざかってゆく。

「遅かったようね〜！あなたの剣は頂いておくわ！」

今日のゲームは楽しかったわよ！それじゃあさよ〜なら〜！」

ヨハネはその場に座りこんだ。ブルーローズ海賊団一行が見えなくなったところ、

船体の半分が海に飲み込まれていた。その沈みかけの船の近くには巨大な黒い影が……。

プオーーーーーン！！

大きな泣き声とともに、その姿を現す！！真っ白い巨体をもつクジラだ！

頭には10メートルにも及ぶ鋭い角。この角で船は串刺しになったのである。

一角クジラは海面に潜り、ものすごいスピードでこちらに迫ってくる。

船体ストレスのところ、一気に空中へ向かって海面からジャンプした。

ヨハネの頭上を優雅に飛び越え、やがて海に潜った。

その衝撃で今度は津波が襲って来た。絶体絶命のピンチ……！

津波は船を丸呑みにした！ヨハネは海に投げ出され、意識を失った……。

海の底へ沈んで行くヨハネ。そこへ一匹のイルカが現れた。

つぶらな瞳でヨハネを見て、「ピユイ」と鳴き、背中に乗せて運んでいった……。

気を失っていたヨハネは、どこからか聞こえる人々の声で目が覚めた……。

ゆっくりと目を開ける……。

目の前には空色の長い髪をし、貝殻などの装飾を身にまとった女性が見つめている。

看病をしてくれていたようだ。女性は心配そうにこちらの様子を伺う。

おしとやかそうな人だ。首輪の貝殻を良く見ると、名前が彫つてある。

「テイス」

それが彼女の名前のようだ。ヨハネは問いかけた。

「ここは一体・・・。そうだ、僕はあるとき海に投げられて気を失ってしまったんだ。」

あなたが助けてくれたんですか・・・？」

すると、テイスは少々困った顔をして、誰かを探すように辺りを見回し、

何処かへ行つてしまった。

ヨハネは何か悪いことでも言ったのかと思いつながら、重い体をゆつくりと起き上がらせた。

やしの木で出来た家。中央には火が起こされており、魚やイカの燻製が吊るされていた。

壁にはサメの頭蓋骨がかけられていた。

あたり一面を見回した後、誰かが家の中に入ってきた。

いかつい顔の大男とテイスがやってきた。野太い声で大男が話しかけた。

「気付いたようだのう。気分はどうだ？」

「もう大丈夫です。有難うございます。」

「そうか、それはよかった。」

おなかもすいていることだろう、娘がオメエにメシを作ったんだ。遠慮せず食つとけ。」

そういうと、テイスがヨハネの横に食事を並べた。

とれたての赤い焼き魚やホタテなどの魚介料理。とろとろのスープ。

テティスがにこやかな表情で食事を渡す。すると大男が言った。
「ああ、すまん、娘はしゃべれねえんだ。名前はテティスって言うんだ。」

おらぁトリトン。父親だ。おとなしいのもあって、あまり友達がいねえんだ。

よかつたら友達になつてやつてくれねえか？」

そういうと、大きな手でヨハネの背中を二、三回たたいた。

「そういえばなあ、オメーが島に流れ着いたことが村のうわさになつて、

外でオメエを待っている奴らがたくさんいるぜ。」

歓迎パーティーでもやっているんじゃないかな？行ってみたらどうだあ？

さあて、俺はまた漁にもどらねえといけねえから、行ってくる。娘と遊んでやつてくれよな。」

ヨハネは少し困った表情をした。それをみたトリトンは、

「はははっ！オラあ、オメエが娘に悪さをするなんざ思つてねーよ。」

そんな感じじゃないからな。はははっ。じゃあな。頼んだぞ。」
そういつてトリトンは去つていった。

テティスは砂の床に『おあじはいかが？』と描いた。

それに答えてヨハネは「おいしいよ。」と返事をした。

食事を済ませたころにはすっかり体調も戻ってきた。

二人は一緒に散歩しようと家を出た。

すると・・・、家の入り口で島の住人が賑やかに集まっているではないか。

みんなは歓迎している。笑顔で迎えてくれる人々。

ヨハネはどういう反応をすればいいのか少し困っていた。

そのとき、島の人たちのなかから一人、長老らしきおじいさんが

やってきた。

「若き青年よ、よくぞこの島へたどり着かれた。ワシはこのオリ
ンポス島の長老じゃ。」

歓迎するぞよ。島のものは宴の準備に取り掛かっているようじ
や。」

島の人たちは長老の言葉と同時に歓声をあげる。

すると、派手な衣装をまとった踊り子ができて、歓迎のダンス
を始めた。

太鼓をうつもの、笛を吹くもの、あつという間にそこはダンスパ
ーティの会場と化した。

音楽の一節がおわつたのち、テティスがヨハネの手をひき、一緒
にダンスしようと誘う。

テティスが踊っているなか、棒立ちのままであったヨハネだった
が、

次第にリズムとテティスの笑顔で自然と体が動きだし、楽しくダ
ンスを踊った。

きりのいいところで、ダンスが終わった後、楽器で音楽をながし
ながら、

みんなは宴の場所へ向かった。

夕暮れ時、宴会の食事が豪華に並ぶ。

仲間同士で楽しく会話するものや、ダンスをするもの。食事に一
生懸命なものもいる。

長老は少し高いところに座り、その後ろには大きな一角クジラの
石像がある。

ヨハネとテティスは長老に呼ばれ、ともに食事をした。長老がヨ
ハネに話しかけた。

「我が先祖代々が守ってきた『ディープブルー』の話しよう。

むかしむかし、ポセイドンという海の神がおった。

人間たちは飢えに苦しみ、次々と死んでしまった。

それを悲しむポセイドンは水を自由自在に操る力のある『ディープブルー』」

という宝石を人間に託した。

その力で魚を捕獲し、飢えの苦しみから解放されたのじゃ。

その宝石に目をつけた悪い奴らが現れ、我が島の先祖はディープブルーを

アトランティス島の深い海に封印したのじゃ。

お前さんはもしかして……、ディープブルーが目的できたのかの？」

それに答えてヨハネは、

「はい。ですが、そのディープブルーが僕の求めているものかどうか分かりません。」

と言つて、ポケットから火の宝玉を取り出して長老にみせた。

「おおお……。なんと美しい……。ワシのみたディープブルーとつりふたつ。」

おぬしの捜し求めているものと同じかもしれぬぞ。」

「本当ですか?!」

「うむ。ワシはおぬしを信用するぞい。おぬしからは邪気を感じぬ。」

ディープブルーを封印しておる神殿へ行ってみるが良い。場所の地図を渡しておくぞ。」

そついうと長老は古びた地図をヨハネに渡した。長老は口ずさんだ。

「はあ……。ワシのせがれもおぬしのように凜々しい男だと良かったのじゃが……。」

んやんや、今の話は聞き流しておくね。今日はゆっくりするのじゃ。

神殿は潮が引かねば入れないようになつておる。明日の朝に出発すればよからう。」

話が終わったあと、ヨハネはテティスと二人きりで食事をした。

食事からでた貝殻と色んな美しい石で、テティスに腕輪の作り方を教わりながら時を楽しんだ。

夜が更けたあと、島の人たちはキャンプファイアーで楽しんでいった。

ヨハネはいつの間にか眠っていた。

テティスはそれに気が付いて、暖かい毛布をヨハネにそっとかぶせた……。

早朝、目が覚めたヨハネは身支度をして長老に教えてもらった神殿へ向かおうとした。

そのとき、背後から長老の声がした。そこには心配そうな顔を浮かべるテティスもいる。

見送りに来てくれたようだ。

「気をつけるのじゃよ。神殿の中には畏や守護する者がおるかもしれぬ。」

用心するようにな。おっと、忘れておったわい。」

そういうと長老は神殿の鍵をヨハネに渡した。

「それじゃあな。無事を祈るぞい。」

テティスはヨハネに近寄った。昨晚テティスが作った貝殻の腕輪をつけてもらう。

とても心配している様子でヨハネの手を自分の胸元によせ、祈りを込める。

ヨハネはテティスの肩にやさしく手を乗せ、

「僕は必ず戻ってくる。待っていてくれ。」

そういい、笑顔でテティスの不安をといた。ゆっくり歩き出すヨハネ。

その後ろで長老とテティスはそっと見送った。

人が住む村の反対側に神殿の入り口である岬があった。

ヨハネが神殿の扉へ近づこうとしたその時、何処かで聞き覚えの

ある声が足を止めた。

「そこのおにいさん。」

声のする方を振り向くと、そこにはブルーローズ海賊団がいるではないか！

ヨハネの顔は険しくなる。エメラルドは慎重に、

「そんなに怖い顔しないで……。ねっ。アタイはアンタと取引に来たのよ。」

そっくり、エメラルドは七星剣を見せた。

「アンタ、これがないとこまるのよね？そうよね？

ここは正当な取引といこうじゃないの。争いごとは好きじゃないの。

「あんたのその神殿の鍵と交換よ。」

「……。わかった。」

エメラルドとヨハネは互いに近づき、交換した。

「うふっ、おりこうさんね。マリモ！ウド！」

その瞬間、ぽっちやりのマリモとノツポで馬面のウドは

鋭い短剣と銃をヨハネの方に向け、警戒した。

「せつかくの鍵を取られちゃうと台無しだからね。

いい？あんたたち。私が神殿の中に入って見えなくなるまでそいつを見張っておくのよ。」

そっくり残したエメラルドはお色気女のオニキスと

モヒカンのハチドリ共に神殿の扉の前へ行った。

エメラルドは扉の鍵穴に鍵を差し込む。

その瞬間、群青色の神秘的な色がたちこめ、

古代の技術で作られた機械のような動きで扉が開く！

エメラルドたち三人は奥へと入っていった。

見えなくなつたところ、マリモとウドは命令通り、警戒を解き、団長の後についていった。

ヨハネはその後を追おうとしたその時！村の方角から大きな音が！

ドゥーーーーーーン！

大砲が発射する音がして、次第に銃声がうなりをあげる。

島人たちの悲鳴の音が……。ヨハネはテティスの顔が頭をよぎった。

まさか、そんなことはあるまいと、無事をいのりながら、村へ走っていった。

村にたどり着いたヨハネ。しかし、既に襲撃された後であった。

住人の民家はボロボロに打ち砕かれ、人々は虫の息。

村の中心にバイコーンをかぶった、人相の悪い貴族らしき人間が一人、

そしてその部下たちが十人くらい立っていた。

襲撃したリーダーが拘束している長老に拷問していた。

「再び問う。ディープブルーはどこにあるのだ……。」

「知ってても、貴様などに教えるものか……。」

「どこまで頑固なのだ……。まあよい、死ね。」

そういつと貴族は冷徹な表情で長老をマスキットで撃ち殺してしまった……。

それを見たヨハネは目を疑い、棒立ち状態。

襲撃したリーダーのオスカーはヨハネの存在に気付いた。

「なんだ……。？貴様は……。？この島の住人ではないな？ん……？

貴様の顔……。何処かで見覚えが……。」

ヨハネは怒りに満ち溢れ、所持している火の宝玉と反応した。

七星剣に火の宝玉をはめ込み、剣を構え、ヨハネの体から真っ赤なオーラが立ち込める……！

それを見たオスカーは危険と察知し、部下全員に射撃命令を下した！

無数の銃弾がヨハネに飛び交う。どこにも逃げられない！

ところが、ヨハネのまとったオーラが全ての銃弾を溶かし、かき消した！

ヨハネの体が燃え盛り、七星剣の姿が変わってゆく！

まるで、燃え盛る龍のような剣に変化したではないか！

さらに、ヨハネの背中から炎の羽が生えてきて、不死鳥へと姿を変える。

ヨハネはオスカーと部下たちに向かって飛翔して体当たりした！

フェニックスストライク！

猛烈な爆炎と無数の斬撃！あつという間に、襲撃部隊は黒焦げになった。

力を解放し、元の姿に戻ったヨハネは長老のもとへ駆け寄った。

手を握り締めるヨハネ。長老は最後の言葉を口にした……。

「もういちど……、息子にあいたかった……」

そう言い残すと、長老は死んでしまった。ヨハネは近くにいたテイスに気づく。

テイスを抱き寄せる。わずかに意識があるようだ。

なにか一生懸命声の出ない口でしゃべっている……。

「（おかえりなさい。）」

「テイス、しっかりするんだ！」

すると、消えかかるともし火のようにテイスは……、

「（ありがとう……、ヨハネ……。とても楽しかった……。」

）

テイスは一筋の涙をこぼし、微笑みをうかべ、息を引き取った。

「テテイ……ス……！」

泣き崩れるヨハネ。

罪もない人々の無残な死によって、こんなに悲しいことが現実におこるなんて……。

テティスと島みんなの笑顔、一緒に作った腕輪、なれないダンスを踊った記憶が……、頭の中によぎってさらに涙があふれてくる……。

深い……、深い悲しみとともに、一緒に過ごしたあの楽しい思い出が刻みこまれた。

ディープブルーの名のように……。

かれるまで泣いたヨハネの背後にブルーローズ海賊団がやってきた。

「こ……これは一体、どういうことなの……？ハツ……、あれは……！」

長老に気がついたエメラルドは駆け寄る。

「親父……、まさかこんな形で逢うことになるなんて……。

ごめんよ……、俺は親不孝ものだ……。ごめんよ……。」「エメラルドは長老を抱きしめ、うずくまる。

夕日が綺麗に海一面と輝く時、ヨハネたちは島みんなを弔い、墓を立てた。

そして、ヨハネはそつとテティスの貝殻の首輪を墓に飾った。エメラルドは言った。

「ヨハネ、俺たちは海賊団をやめて真つ当な人生を歩いていく。いろいろと……、すまなかつた……。許して欲しい。」

父親の死で、まるで人が変わったかのようなエメラルドであった。

エメラルドはカバンから何かを取り出した。

「俺たちが神殿に入って見つけた宝だ。」

ヨハネの捜し求めていた宝石とは違うが、この角笛はきつと、何かの役に立つと思う。」

いろんな宝石がちりばめられた角笛だ。エメラルドはヨハネに角笛を渡した。

「ありがとう。」

その瞬間、お互いになにか強い信頼関係と絆が結ばれたような感じがした。

夜がやってくる。エメラルドはヨハネを自分の船へ案内した。

「今夜は俺の船でゆっくりしておくといいさ。遠慮するなよ。」
そういつてヨハネたちは海賊船で一夜を過ごした。

明くる次の日、なにやら騒いでいる声が出て、ヨハネは目が覚めた。

「ヨハネ、大変だ！例のデカブツがまたきやがった！」

慌てた様子でヨハネを起こすエメラルド。

船外にでてみると・・・、そこには旅客船を一撃で沈めた一角クジラが

海賊船の周りを泳いでいるではないか。

「くそう、このままじゃ俺たちの船も貫かれちまう！街に帰れなくなってしまうぞ・・・。」

ヨハネはふと思いつき、エメラルドにもらった海の神殿の宝である『角笛』を手にして、強く吹いてみた。

すると・・・、あたりには美しい音色が響き渡り、

一角クジラは海面からゆっくりと顔を出した。一角クジラはヨハネに話しかけた。

「七星剣に選ばれし若き後継者よ・・・。」

そなたの七色の音により、古の誓いが証明されました・・・。

時は来ました・・・。青海の母胎、無限の生命たる水の宝玉・・・。

さあ・・・、受け取りなさい。」

そういつと一角クジラの傍らに、あの時助けてくれたイルカが姿を現した。

口先にはやさしい青色で輝く宝玉が・・・。イルカはヨハネの近くによつて来る。

ヨハネは宝玉を手にとった。すると、イルカはかわいい鳴き声で

挨拶して、

一角クジラのそばに戻った。

水の宝玉……。まるで全世界の海が見渡せるような感じがする。そして、その深い深い青い色は、どこか、冷たく哀しい気が立ち込めていた。

一角クジラは語った。

「ヨハネよ……。よく聞きなさい。貴方の集めるべく宝玉はのこり五つあります。」

風・地・光・闇・空。この五つがそろった時、貴方の本当の力が引き出され、

真の目的が達成されることでしょう。宝玉は貴方の感情でもあるのです。

これから先の旅は……、

忘れ去られた貴方自身を取り戻すための旅ともいえることですよ。」

ヨハネは凜々しい顔で宝玉を見つめる。さらに一角クジラは語る。「滅亡の使者は覚醒してしまいました。」

彼はこの世界を浄化するために、この世のありとあらゆるものを駆使して

破滅への計画を立てています。どうか、この美しい地球を守ってください……。」

ヨハネはうなずいた。

「貴方がまた傷つき悲しみに追われたとき……、この広い海を思い出してください。」

また逢える日を待っていますよ……。」

すると、一角クジラは静かに潜り、何処かへ去っていった……。エメラルドは言った。

「それがヨハネの探していた宝玉か。やったな、ヨハネ。」

「ああ。エメラルドたちのお陰だ。ありがとう。」

「なあと、礼には及ばないって。なあ、お前たち。」

団員一同は「ハイ！」と元気良く返事した。

「さてと、まちにもどるか！お前たち、出航の準備だ！」
そういつて海賊団は出航の準備に取り掛かり、街の方角へ船を走らせた。

街の港に到着したヨハネたち。とうとう、エメラルド達との別れの時間がやってきた。

「ここでお別れだな。さびしくなんか・・・無いぜ・・・。」
と、エメラルド。しかし彼の顔からはさびしい表情が。

「またあおうぜ！ここにすれば、俺たちはいるからさ！何かあったときは駆けつけるぜ！」

ヨハネは「ああ！」と返事をして握手をし、固い友情を結んだ。
名残惜しくもその場を去ってゆくヨハネ。海賊団は手を振ってヨハネを見送っている。

「（がんばれよ・・・！）」

エメラルドは強いまなざしでヨハネの無事を祈った。

第三章 勝利の歓喜

《第三章》勝利の歓喜

エメラルド率いるブルーローズ海賊団と別れたヨハネは、どこへ行けばよいのか、

何を探せば宝玉の手がかりが掴めるのか、見当もつかなかった。ふらふらと歩きさまよう。

美しい建造物が立ち並び、道端でアーティストが絵を描いている姿が見える。

歩き疲れたヨハネは、ビーナス像の噴水が印象的な、自然豊かな公園で一息ついた。

そこからひととき目立つ建物が顔を出している。ヨハネはそこへ行ってみる事にした。

古代博物館。ここには様々な歴史的文化的文化財や、伝説に登場する人物の遺品、

標本などが展示されている。

入館したとたん、まるで自分が宇宙空間に投げ飛ばされたかのような、

壮大で無数の夢を広げてくれる、そんな気持ちを持たせてくれる。様々な展示物でヨハネは興味を示す。

ちょうど、ユニコーンの剥製に魅了されているとき、後ろから館長らしきおじいさんが寄ってきた。

「ほっほっほ、美しいじゃろ。」

ユニコーンの涙は傷ついた者を癒す力があると言われておるのじゃ。

キミはこいつのがすきなのかの？」

「え、あ、はい。」

「そうかそうか、ゆっくり見ていくといいぞい。ん・・・？それは・・・。」

館長はヨハネの七星剣に目がつき、驚いた。

「ひゃあ、それは七星剣じゃなかるうか?!」

「はい、そうです。僕の先祖代々から伝わる家宝です。」

「これはすごい・・・!まさか、あの伝説に出会えることが出来るなんて!」

この年齢になってから、もはや永遠に触れることが出来ぬと思つておつたが・・・。」

一瞬にしてヨハネのファンになった館長は握手をして自己紹介をする。

「ワシはこの館長、ノームといますじゃ。キミは?」

「僕はヨハネ・アレクサンドロスといます。」

「アレクサンドロス・・・!やはりそうじゃ、間違いない。なんという縁じゃ。」

是非とも、キミの話聞かせて欲しいのじゃが・・・。見せたものもあるのじゃ。

おねがい、わしと付き合ってくれんかの?」

「かまいませんよ。」

館長のノームは感激して、館長室へヨハネを連れて行った。

フワフワの高級の椅子に座るヨハネ。香りの良い紅茶とチーズケーキが運ばれてくる。

ヨハネはノームに七星剣と宝玉についての話をした。

「ほおおおう・・・。キミにはとても重要な使命を受けているのじゃな・・・。」

ちよつと、七星剣を見せてくれんかの? ホッホ、大丈夫じゃ、盗つたりせんよ。」

そういつてノームは七星剣をクリームが付いているお皿をなめる

かのように眺めた。

ヨハネの手に持っている宝玉にも目がいった。

ノームは割れ物を扱うような手の添え方で七星剣を返した。

「それが宝玉か・・・、素晴らしい・・・。」

目を輝かせたノームはまるで子供のようであった。感動して相づちをうつ。

「いやあ、こんな素晴らしい日はないわい・・・。」

もうこれで心置きなく天国へ・・・。いかん、いかん。

伝説の神器を見せてもらったのじゃ、お礼といっちゃなんだがの、

お前さんに見せたいものがあるのじゃ。」

そういつて、ノームは女助手のピクシーをよびだした。

カジュアルな服装で性格はおっとり系な感じだ。

ノームは絵画を持ってくるように命じた。

飲食が終わった食器はどかされ、絵画をヨハネの前に持ってきた。ピクシーが絵画を置いた瞬間、ノームがイヤらしい手つきでピクシーのオシリにふれた。

「イヤア、館長、やめてくださいっ！」

バシッ！

おっとりしたピクシーの表情であったが、すさまじい平手打ちがノームの頬を直撃した。

「あいたたた・・・、すまん、つい手が・・・。ごめん・・・。」

「もう、館長ったらあ、エッチなんだから。」

ヨハネは少し笑っている。

ノームは頬を手ですりながら、絵画の保護ケースとシートを取った。

ヨハネは観賞用の手袋をつけて絵画を手を取った。

その絵には美しく巨大な樹が描かれており、根元には美味しそう

な実が一つ熟している。

よく見ると、宝玉のような輝きをしている。地の宝玉だ。そう直感した。ノームは語る。

「もう気付いておるようじゃが、この熟した実のようなものは宝玉なのじゃ。」

大地を司る宝玉。その絵は冒険者が描いたものじゃ。

この大きな樹は古代樹でな、植物のように見えるが、化石なんじゃよ。

といつても、死んでいるわけではない。

何千年もの月日が経った今でもなお、生き続けておるのじゃ。

この絵を描いた彼も宝玉を狙っておったそうじゃが、

そこを守る大きな白い蛇がおって、手に入れることは出来んかったとさ。

キミはそこに行かなければならないのじゃろ？

そこはイタリアの山岳地帯にある深い谷の洞窟じゃ。場所を地図で教えてあげよう。」

そういうとノームは小さく折り畳まれた地図を出し広げ、

古代樹のある場所をマークして再び小さく折りたたんで渡した。

「かなり険しい道じゃ。十分に心して挑むが良い。」

地の宝玉を手にしたとき、またワシに見せておくれ。一番乗りでのう。ホホホ。」

ピクシーは絵画を元の安置所へ戻しにいった。

二人はもう一杯の紅茶を飲んでゆっくり時間をくつろいだ。

じゆうぶんに時間を過ごしたヨハネはそろそろ出発することにした。

博物館の入り口の前でノームとピクシーはヨハネを見送っている。

「ホホホ。今日はとても素晴らしい時間がすごせたよ。感謝するよ。」

くれぐれも、気をつけてのう。まあ、宝玉を二つも手にしている

キミならたやすい事かもしれんがの。ホホホ。それじゃあな。」
「はい、いろいろと有難うございました。」
そして、ヨハネは博物館を去っていった。

もう既に夕暮れ時を迎えていた。スペインからイタリアまでは遠い。

車で移動しようと思っていたが、困ったことにお金が全くない。仕方なく、腕につけていた何百万円もの価値のある腕時計を質屋で売却して資金にあてることに。

オカマの店長を相手に苦しみながら、ようやく多額のお金を手にする。

そうこうしているうちに、いつの間にか、夜になった。

再び広い公園のベンチに腰をかけた。

すると、一人の無精ひげを生やした四十歳くらいの男から声をかけられた。

「あんた、こんなところで野宿かい？」

こんな夜更けに一人でいたら、警察に怪しまれて捕まってしまうぞ。

どうだ？うちにこないか？一日くらいとめてやってもいいんだぜ。」

どこかうさんくさい。

それもそのはず、この男は質屋から出てくるヨハネを付回していたのだ。

隙をみてお金を盗もうとたくらんでいる。

ヨハネはそうともしらず、無精ひげの男を信用してしまい、家へついて行ってしまった。

ヒゲ男の家へたどり着いた。

狭そうな家だったが、一人で暮らすには申し分ないほどの広さで

あった。

「そつちに来客用の寝室があるんだ。そこで寝るといいさ。」

ヨハネはそこへ荷物を降ろして居間へ。

その時ちようどテレビからニュースが流れ、ヒゲ男とヨハネはそれに注目した。

『最近問題になっているニュースです。

イタリアで凶暴な動物が何かの異変により暴れだし、

多くの住民に被害が出ております。

軍事通信からはモンスター討伐部隊を結成したとの報告があり、
出撃命令にて応戦中とのことです。

モンスターは山岳地帯から現れたとの調べがありました。

凶暴性が高く、命の危険が高いため、住民の避難および警戒令
が発信されております。』

ヒゲ男はつぶやいた。

「ひゃあ・・・こわいな・・・こつちにまでこなきやいいが・・・」

ヨハネは頭の中で「なにか嫌な予感がする」と感じながらも、睡眠をとることにした。

「それじゃあ僕は寝ますので。」

そういつてヨハネは少しホコリくさい部屋に入っていった。

ヨハネがベッドに入って眠ったその時、もう一つのニュースが流れた。

『先日、スペイン貴族のオスカーと率いる仲間たちが何者かによって
殺害されていたことが分かりました。

警察は瀕死で逃げてきた仲間とされるアクドさんから調査した

所、

犯人は金髪の青年、剣を持っているとのこと。

そのあと、アクドさんは病院に搬送されましたが、お亡くなり

になりました。

警察は金髪の青年に懸賞金百万円をかけて調査中です。」

まさか！とおもったヒゲ男は、すぐさま受話器をとり、警察に通報をした。

さらに、逃げられないようと、家中の窓の鍵をかけた。

数分もしない間に警察が到着した。ヒゲ男は、ボソボソと小さな声で警察に案内する。

「この部屋の中です。彼がいます。」
その時だった。

ガシャーン！！

割れるガラスの音。警察は激しく扉を開けたが時すでに遅し。

ヨハネは窓から逃げ出していた。警察は部下に命令する。

「追えー！まだ遠くには行っていないはずだ！追うんだ！」

ヒゲ男は悔しい顔をして、小声でつぶやいた。

「ちっ、逃げやがって・・・頭のいいクソガキめ・・・俺の金が・・・。」

ヨハネは窓にあつた汚れたカーテンで身を隠し、ひたすら走る。

向かい側から誰かが走ってくる。危ない！と思ったその時、二人は衝突してしまった！

「いったあゝい・・・どこ見てるのよ、いたた・・・たんこぶできたじゃない！」

目の前には高校生くらいの女の子がしりもちをついていた。

ピンク色のシヨートヘア、服装は学生服だろうか。

ヨハネの羽織っていたカーテンがはらりと地面におちて、

姿が見えた瞬間、女の子は感激した。

「キヤアゝ、なんてかつこいいの?!わたしの王子様に違いないわ・・・!」

きつとそうよ！運命の人だわ・・・！」

ヨハネは立ち上がり、すぐに走り去ろうと思ったが、女の子に手を掴まれて逃げられない。

「はくささないっ。わたしはエレミア！始めまして！」

ねえ、どうしてそんな格好しているの？誰かに追われているの？

あ、わかった、こんな美男子だからきつと、ファンから逃げてるのね！？」

強引なエレミア。ヨハネは困った様子で、

「僕はヨハネ。悪いけど、貴方と付き合っている場合じゃないんだ。」

すまないが、手を離してくれないか？」

そついうとエレミアは、

「だーめー。本当は知ってるよ。君のことがニュースで出ている有名人つてこと。」

とても警戒されているから、どこへ逃げてもだめだよ！とりあえず私についてきて、ね！」

と言つて、無理やりビジネスホテルへ連れて行った。

カウンターの前で鍵をもらつと、フロントクラークに質問される。

「お客様、お隣の方は・・・？」

「えっ、あつ、私のお兄ちゃんだよ！ちよつと逢いにきてくれたの！」

一緒に遊んでくれるんだよ。ね、お兄ちゃん！」

「えっ、ああ、うん・・・。」

そついうと、ひやひやしながらエレベーターに乗っていった。

部屋へ入り、扉を閉め、二人とも「ホッ」と、ため息をついて安心した。

「明日の朝までここで隠れているといいよ！」

「あ、ありがとう。それにしても、なぜホテルにいるんだ？ここで住んでいるのか？」

「ちょっとした家出だよ。お父さんとお母さんがうるさいから、逃げてきたの。」

「秘密だよ！だれにも言わないでね！」

二人は丸いテーブルの椅子にこしかけた。

「あらためて自己紹介するね。わたしエレミア。よろしくね！」

「こつみえても魔法学校の生徒なの！君に魔法をみせたいけど、卒業して許可を得るまで使っちゃダメっていう条約があるの。」

君は？君は？」

「僕は宝玉というものを探して旅をしているんだ。」

「宝玉？なにそれ？」

ヨハネは宝玉をエレミアに見せた。

「きれえ〜い……。でも、ものすごい魔力を感じるよ。」

「なんか……。吸い込まれてしまいそう……。ちょっと怖いか

も……。」

「宝玉をしまい、なぜか地の宝玉の話もしてしまった。」

「明日、車でフランスに行くんだ。山岳地帯の谷に『地の宝玉』が眠っている。」

エレミアから輝かしいまなざしがヨハネをつらぬいてくる。

「うわあ〜！たのしそう！私もついていく！ねね、いいでしょ？」

！」

「だめだよ。そこはとっても危険な場所なんだ。命を落とすかもしれない。」

「危険でもいいよ！せつかく私の王子様に出会えたんだもの！」

「どこにでもついていくわ！別れたくなんかないよ〜！」

「ダメっていったらダメだって。」

エレミアはぶすくれて少し悪知恵を働かせた。

「へっへん……。」

そのままだと駅員さんにはれちゃって、警察に通報されるかもしれないよ〜？」

ヨハネは困って腕を組んだ。

「わたしがいれば、君に変身の魔法をかけてあげられるよ！さして、どうする？」

「わかった。一緒にいこう。でも、イタリアに着いたらそこでお別れだよ。」

「うん！」

この返事は全くのウソであった。

エレミアはイタリアについてもヨハネと別れるつもりはこれっぽちも考えていない。

会話が終わった後、二人はベッドの上でまるで兄妹かのような雰囲気

でトランプをして遊んだ。遊び疲れた二人はお風呂に入ることにした。

すこし顔を赤くしたエレミアは言った。

「私後から入るから、先に入っていていいよ。」

「わかった。じゃあお先に。」

そう言うとヨハネはお風呂に入った。

あがってきたあと、間をとってエレミアがお風呂に入る。

エレミアは恥ずかしい気持ちでいっぱいだった。

「の、のぞいちゃダメだよ！」

ヨハネは「ああ。」と無関心な返事をする。

エレミアの入浴がおわり、二人は眠ることにした。

ベッドはシングルだったので、ヨハネはテーブルの椅子に腰掛け
て寝ようとした。

「僕はここで座って寝るから、エレミアはベッドで寝ていいよ。」

「ありがとう……ごめんね！おやすみなさい！」

「おやすみ……。」

静かに夜が過ぎた。窓からは満月がでており、
月の光がまぶしいくらい綺麗な夜だった……。

翌日、いきなりエレミアの元気な挨拶が飛び込んできた。

二人はテキパキと支度をすませ、部屋を出た。

ピカピカに磨かれたカウンターの前に立つ。

二人はフロントクラークに鍵を渡してチェックアウト、

・・・するつもりだったが・・・。

会計でヨハネが自分の宿泊料金を出した時、とんでもない事実が発覚した。

フロントクラークと、ホテル関係者がなにやら話している。

フロントクラークがうなずいて、ヨハネに思いもよらない事実を話した。

「お客様・・・

大変申し訳ありませんが、お支払いいただいた金額では宿泊料金が足りません。

エレミアさまのいままでの『ツケ』を合わせて、95万円お支払い頂かないと

チェックアウトが出来ません。」

気まずい雰囲気があった。

エレミアは一ヶ月前からホテルで住み込んでしまい、十日間までは料金を支払えたが、

未払いのまま二十日が過ぎていたのだった。

「えへ、えへへへ」

エレミアは笑ってごまかした。

ヨハネは仕方なく札束を取り出し、フロントクラークに手渡した。丁寧な手つきで札束を確かめる。

「はい、確かにありますね。それではここにサインを。」

ヨハネはホテルにいた足跡を残さないよう、父の名を使って記入した。

フロントクラークは笑顔でお辞儀をした。

「有難うございました。またのご利用を心よりお待ちしております。」

す。」

そして二人はホテルを去った。ホテルの入り口から少しでたところで、

エレミアは立ち止まり、感激の言葉を放った。

「すごい！ヨハネってお金持ちだね！やっぱり王子様なんだ！」

ヨハネは無表情。エレミアは空気をつかんで言った。

「ご……ごめんなさい。いつの間にかあんなになってしまつて。隠したりして。」

「大丈夫だ。気にしないで。自分を悪く責めないで。」

もう過ぎ去ったことなんだ。それに、お金が足りなくなれば、どこかで稼げばいいさ。」

「……うん、ありがと！」

心をいれかえて、二人は駅へむかった。

エレミアはスキップをしながら、まるで遠足にいくかのようなウキウキ気分であった。

駅に到着。多くの人々が交差する。

ずっと昔に建てられたレンガ風な駅で、古い歴史が漂ってくる感じを受ける。

二人は乗車券を買う前に立ち止まり、エレミアが話しかけた。

「まずはヨハネを変身させなくっちゃね！こっち、こっち。」

そういうと、二人は女子トイレへ入っていった。

ドアを閉めて、エレミアはカバンから怪しげな色のポーションを取り出した。

コルクの栓を抜き、カバンからも一つ、今度はなにかを包んでいる紙を取り出した。

その中にはなんと、得体の知れない誰かの毛が一本、入っていた。かまわず、ポーションの中に入れてピンを振る。ヨハネはそれを見て嫌な予感が走った。

「はい！ヨハネ、これを飲んで！」

手渡された気持ち悪いポーシヨン。あまりにももの衝撃で手が止まってしまう。

「大丈夫だよ！実証済みだから、ちゃんと変身できるよ！」
そういう問題ではなかった。顔が引きつるヨハネ。

飲む前から不味い顔をしながらも、一気にポーシヨンを飲み干した。

すると、見る見るうちにヨハネの姿が変わっていくではないか！
あっという間におばあちゃんに変身した！

「やったー！うまくいったわ！これで汽車にのれるわ！」
洗面所の鏡で確認したヨハネはとても驚いた。

二人は女子トイレから出て、すぐさま乗車券を買った後、駅員に見せてホームへ向かった。

妙に駅員の視線が気になる。ヨハネは心臓をバクバクさせながら、
汽車を待っていた。

エレミアはヨハネの気も知らず、のんきに笑う。

「あはは。まるで新婚旅行みたい！周りからはおばあちゃんと孫
にみえるのにな！」

「なんだかおかしい！」

そういいながら、エレミアはヨハネと腕をくんで、肩を寄せる。

五分くらい経過した後、汽車は到着した。黒いSL。

特徴の煙は出ていないようだ。

近代技術により、最近では魔法エネルギーが原動力になっているらしい。

二人は乗り込み、空いているに座った。

列車がゆっくりと動き出す。大きな汽笛とともに出発した。

エレミアはとても嬉しい気分。一方ヨハネは緊張のあまり、固まって動けない状況だった。

それを見たエレミアは小声で喋る。

「大丈夫だよ、ばれない、ばれない。効果も一日くらい持続しち

やうから！」

ヨハネは少し気が楽になったようだ。

お昼になり、二人ともお腹をすかせる。

通りかかった販売員にお弁当と飲みものを注文し、食事を始める。窓から緑の美しい景色と、さわやかな風が流れ込み、食事がより一層と美味しく感じる。

食事を終えて、一時間くらい経った後、車窓の景色は次第にイタリアの町並みが映りこんでくる。もうすぐ駅に着くようだ。車内放送が流れて、乗客のみんなは降りる準備を始める。列車のスピードはゆっくりと速度をおとし、駅に止まった。

列車旅行の気分を味わった二人は降りて駅の入り口まで歩いていった。

入り口に差し掛かったところ、多くの警察が待ち構えていた。どうやら、ヨハネを捜索しているらしく、一人一人を検問している。

チェックが終わらなければ、通り抜けられない様子。

息を飲み込む二人。心の中で神頼みしながら検問へ。警察に腕をつかまれる。

「おばあさん、そのローブをちよつと外してもらえないかい？」

ヨハネはその通りにした。

しかし、七星剣があからさまに目立ってしまい、怪しまれる。警察は疑問に思った。

「そんな物騒なものを持ち歩いて、何に使うんだい？」

それに、そんな若者の着るような服装、珍しいファッションだね、おばちゃん！」

警察はニヤつきながら、紫色のケープ姿の女性を連れてきた。

「ちよつとこのおばあちゃんが怪しいから、魔法で調べてくれないか？」

そう警察は頼み、なにやら怪しい呪文を唱えはじめる女性。

詠唱が終わった直後、女の目が光だし、

「この方はおばあさんではありません。金髪の青年です。」
と指を指して言った。

すると、ヨハネの体は元にもどり、正体がバレてしまったではないか！

二人は逃げようとしたが、既に多くの警察に囲まれていた。

「またもや七星剣を奪われ、二人は警察署へ連れて行かれることに
。。。」

「ちよつと、署までご同行ねがいます。」

二人はパトカーにのせられ、警察署へ。

取調室。警部とヨハネ、そして一人の部下で取調べが始まった。

最初に警部が問う。

「お前が、オスカーとその配下どもを黒こげにしたのだな・・・
？」

ヨハネは正直に話した。

「はい。しかし、それ以前に問題が発生していました。」

「どういうことだ？話してみる。」

「僕がオスカーを見つけた時、既にオリンポス島の住民がその軍隊たちによって

襲撃うけていました。住民たちはみんな死んでしまい、僕の友達までも。。。」

許せなかった僕は復讐をして殺してしまいました。。。」

部下が怒鳴り、机をたたいてヨハネの襟をつかんだ。

「そんな話、つくり話に決まってる！お前のような犯罪者はみんなそつ言うんだよ！！」

警部が部下の手を解く。

「やめる。真実がわかってねえくせに、追求するんじゃない。」

「そうか。。。」
確かに現場を調べたところによれば、島の間
は一人もいなかった。

墓がたてられていたが、あれはお前がやったのか？」

「はい……。」

ヨハネはあの時の悲しみをあまり思い出しなくなかった。

「お前を見逃してあげたいのも山々だがな、人を殺している故に、お前も犯罪者だ。」

罪を償わなければならん。お前の判決が下されるまで牢屋に入っ
つてもらうぞ。」

そういうと警部はヨハネの腕に手錠をかけて、牢屋に連れて行く。
廊下を渡っている途中、エレミアがよってきた。

「警部さん、ヨハネはどうなっちゃうの？どうして牢屋に入れら
れちゃうの？」

涙ぐんでいるエレミアに警部は話しかける。

「お嬢ちゃん、今日はもうおうちに帰りな。こいつは罪びとだ。」

しばらくの間、牢屋で頭を冷やしてもらった。

牢屋へ向かう警部とヨハネ。それを見つめるエレミアは叫んだ。

「警部のばかあー！私の王子様はそんなことしない！私はヨハネ
を信じているから！」

その叫びもむなしく、ヨハネは牢屋の方へ姿を消した。

牢屋の前。手錠を外され、ヨハネは中に入れられ、

重い鉄格子の扉がガシャンと音を立ててヨハネを閉じ込めた。

エレミアは警察署の外でうずくまって待っていたが、

牢屋に入れられたヨハネをどうすることも出来ず、呆然としてい
た。

「ずっとあのままなのかな……。」

魔法を使って助けたいけど、迷惑かけちゃうだろうし、どうし
たらいいんだろう。」

悩んでいた時であった。イタリアの軍隊が警察署に駆け込んでき
た。

エレミアも気になって、後をついて行った。

軍の隊員が叫んだ。

「報告です！モンスターが街に大量発生です！軍だけでは手がた
りません！」

警部が声に反応して飛んできた。

「何だと・・・！？首相に連絡せねば！」

「・・・いやまてよ、あの青年を使ってみるか・・・。」

警部は牢屋にもどり、横になっているヨハネに話しかけた。

「ちよつといいか？」

ヨハネは起き上がり、鉄格子を挟んで顔を向け合わせた。

「どうかしましたか？」

「実はな・・・、街に大量のモンスターがでてきてな。

軍の力では間に合わなそうなのだ。そこで、お前の力を借りた
いと思ってる。

もし、協力してモンスターどもを倒してくれたら、

何とかしてお前を無罪に仕立ててやるが、出来ないか・・・？」

「わかりました。協力します。」

警部の意見に合点した。

警部はヨハネに七星剣と宝玉を返し、手錠をはずした。

入り口にはエレミアが。

「ヨハネ・・・！よかった！無実になったのね！」

「まだ罪が無実になったわけじゃないけど、

モンスター退治に協力するため、釈放されたんだ。」

「わたしも行く！ね、警部さん、町のためなら魔法使ってもいい
よね？」

警部は言った。

「お、俺の判断だけでは許可なんて取れないが、まあ・・・いい
んじゃないのか？」

「私、がんばるから、だからヨハネ、つれてって！ヨハネのため

に頑張る！」

「わかった、でも危ないと感じたら逃げておくんだよ。」
「うん！」

エレミアはヨハネのためになれる事がとても嬉しくてたまらない。
警部は二人の協力を軍人に説明した。

「この二人を現場まで連れて行ってくれ。頼む。」

「わかりました！さあ、乗ってください！」

エレミアとヨハネは軍車にのりこみ、現場へ直行した。

現場にたどり着くヨハネたち。車を止めて、辺りを見回した。
住民は既に避難しており、爆撃や銃声が轟いていた。

ガシャン！

車の上から何かが飛び乗って来たようだ。

ヨハネとエレミアは急いで車から降りる。

車上には、爪を立てて雄たけびをあげながら、二本足で立つライオン
の姿が！

ヨハネは七星剣を構えてソケットに火の宝玉をセットした。
みるみるうちに炎の剣に変化した。

エレミアはびっくりして思わず「すごい！」と声を上げる。

ヨハネは刹那の俊足でライオンを倒した！

それに見とれているエレミアの背後にリザードマンが襲い掛かる。

「エレミア、あぶない！」

ヨハネが叫んだ。その瞬間、エレミアの体の周りに電気の帯があらわれて、

リザードマンを感電させた！

「私に触れようとするなんて、あまいわね！ありがとう、ヨハネ。」

ヨハネはうなずいた。車の屋根からおりて、隊長に原因となる場

所を示す。

「モンスターはおそらく、この先の山岳地帯の谷から湧き出ているんです。」

僕はそこにいって、根源を倒してきます。」

「そうか・・・、そうとわかれば早いもんだ。」

だが、山岳地帯の谷に降りるためには、ヘリが必要になってくる。

ここからB地点まで多少あるが、頑張ってくれたまえ。」

「わかりました。」

「健闘を祈るぞ。」

隊長はヨハネたちに作戦地図をわたし、敬礼をした。

ヨハネとエレミアはB地点へと走り出す。

途中、幾度もモンスターに阻まれた。

凶暴化したゴリラ、巨大化したカマキリ、多種の動物を合成したようなコカトリス。

この襲撃してくるモンスターはいずれも、動物が変異したものでありであった。

ヨハネは燃え盛る剣で敵を切り裂き、時には、水の宝玉で空気中の水分を

モンスターの呼吸器に詰まらせ窒息させる技を繰り出した。

エレミアは古代語の呪文をとнаえて、炎を具現化したり、サイコキネシスで敵をなぎ払う。

そろそろB地点だ。そう思った矢先に、一人の軍人がモンスターに襲われているではないか！

襲い掛かっているモンスターはキマイラだ。

鋭い爪が軍人を引き裂こうとしたその瞬間、ヨハネは七星剣に水の宝玉を入れ替え、

キマイラに向かって剣を槍のように投げた。

見事に命中！キマイラの血液が凍りだし、動きを瞬時に止める！

水の剣に変化した七星剣を引き抜くヨハネ。軍人は言った。

「ひいー！た、助かった・・・！ありがとう。」

ヨハネは近くに止まっていたヘリを見つけて、

「このヘリで山岳地帯の谷へ連れて行ってもらえませんか？」と聞いた。

固まって動かないキマイラに見とれていた軍人は、ヨハネの質問に気づき、返答した。

「あ・・・、ああ！もう隊長から無線で連絡は着ているからオツケーさ。さあ、乗って。」

ヨハネたちはヘリに乗り込み、離陸した。

しつこく地上からモンスターが襲いかかるうとしていたが、すでに10メートルほど上昇していたのでモンスターの手は届かなかった。

これで安心したかと思いきや、今度は空中で巨大なハチや、ワイバーンが無数に飛び交っていた。

操縦者は無線で救援をし、襲い掛かってくるワイバーンにミサイルや機関銃を撃ち込む。

倒しても、倒しても、きりがなげ様子。

敵の体当たりをすれすれでかわしながら、モンスターどもを撃退する。

山岳地帯が見えてきた。ようやく救援がきて、ヒヤヒヤしていた空中戦も安定してくる。

そして・・・、大口を開けた谷が見えてきた。

ヘリは限界まで寄せて、ロープはしごを下ろした。エレミアは絶叫した。

「キヤー、高いよー！」

高所恐怖症であったエレミアは顔を青ざめた。ヨハネは言う。

「降りられないなら、ヘリで待っていて。僕一人で行ってくる。」

「だ、だいじょうぶ……！ヨハネとならどこにでもついていく！……うわぁ……。」
そういいながら、二人は谷の底に降りていった。

地面に足がついたとき、目の前を見るとそこには、博物館で館長に見せてもらった時の絵に描かれていた、美しい樹が存在している。

しかし、熟されている木の実が見当たらない。
エレミアは感動のあまり思わず声を上げる。

「うわぁ……、きれーい……。こんな美しい樹があるだなんて知らなかった……。」

「そんな悠長な気分になっている場合じゃないようだ。」
ヨハネはそう言いながら身構えた。あわせてエレミアも警戒する。ズルズルと引きずる音、それと同時に、多種のモンスターが集まってくる。

だが、モンスターたちは襲いかかって来ないようだ。

樹の裏側から巨大な白い蛇が姿を現した。顔の大きさは2メートルくらいだろうか。

「キヤー！あんなにでっかい蛇、ひと飲みになれちゃう！」

エレミアはヨハネの後ろに隠れてしまう。

巨大な白蛇の目からは何やら光るものがのぞいて見える。

白蛇は長い舌を出しながら、ヨハネに話しかけた。

「グググググ……、ヨハネ……よくきてくださいまし……ググググ。」

二人は白蛇の言葉がわかった。警戒を少しとき、白蛇の話を聞き入れる。

「私は……グググ、大地の宝玉を守護するウロボロスで……す。」

貴方に宝玉をお渡しするつもりでしたが……グググ、

私が眠っている隙に・・・、何者かによって宝玉を奪われそうになり・・・、

グググ・・・やむを得ず自分の体に取り込んでしまいました・・・。

何者かが・・・私の体に邪悪な物質を・・・ッググウ、体が思うように動かせないのです・・・。

モンスターが生み出された原因は、この大地の宝玉と混乱した私の力による・・・もの・・・グググッ。

もう・・・限界が近いようです・・・。

お願いします・・・。私を倒してください・・・。

ソレシカ・・・グググッ・・・人間たちヲ救ウミチガ・・・ググググ・・・

ウロボロスが喋れなくなった途端、見る見るうちに姿態が変化しだした！

首は六本に分裂し、表皮は黒く変色してゆく。

ウロボロスはヒュドラに姿を変えてしまった！

再び身構える二人。周りにいたモンスターはヒュドラの存在に恐怖し、

どこかへ逃げ去って行った。

ヒュドラが襲い掛かって来る！一本の顔から猛烈な炎をふきだした！

エレミアは念動力のバリアーで炎から身を守る！

ヨハネは隙を見計らって炎を噴出す首を斬り裂いた！

ズドーン！！

重たい首が地面に落ちる！

だが、斬られたヒュドラの体から、新しい首が生えてくるではないか！

「くつ・・・、再生するのか！」

ヨハネは七星剣を氷の剣にかえて、再び斬りかかる！

だが、ヒュドラが口でタイミングよくヨハネの七星剣をつかんでしまう。

ヒュドラは口をあけて離し、ず太い尻尾でヨハネを跳ね飛ばした！
ものすごい衝撃で樹に激突！意識が朦朧になる。

エレミアはヨハネを助けるため、雷雲を具現化させて雷で攻撃するが、びくともしない。

それに気づいたヒュドラはエレミアを睨み付けて体をすくませる。
恐怖のあまり、立ち上がることが出来ない。

ヒュドラは一生懸命体を起こそうとするヨハネを捕まえ、長い体で巻きつき締め上げる。

「ぐあー！！」

苦しさを叫ぶヨハネ。絶体絶命か・・・、そう思った時である！
後方からバズーカの弾が飛んできて、見事にヨハネを捕まえている首に直撃した！

ヨハネはヒュドラの首とともに地面に落ちた。隊長はヨハネもとに駆けつけた。

「大丈夫か?!こいつが・・・、親玉だったのか・・・！」

打ち抜かれた首は朽ち果て、ヒュドラの体からまた新たな首が生えてきた。

隊長は言った。

「復活するのか・・・、生き物にこんなものが実在するなんて・・・」

「。。。」

へび睨みから解放されたエレミアも、ヨハネのもとへ駆け寄った。

「大丈夫?ヨハネ。ごめんなさい、アイツににらまれると動けなくなってしまうって。」

「ああ、気にするな。それよりなにかいい手を考えなければ・・・」

「。。。」

ヨハネは再生している時のヒュドラの動きが停止することに気がついて、

パツとひらめいた。作戦を立てるため、ヨハネは二人に話す。

「あの光り輝く目がおそらく弱点なはず……。二人はほかの首を倒して欲しい。」

アイツが再生を行っている時に、動きを止めるから、僕はその隙にあいつの目を狙う。」

「ああ、分かったぜ。」

「うん！」

三人は一致団結して作戦に入る。

隊長はヒュドラを威嚇する。

「うおらうおら！こつちだぜ、ベイビー！」

そういうと、バズーカを発射してヒュドラの首を一つ倒した！

「へへーン、こつちだよ！」

エレミアは風の刃を作り出し、首をまた一つ落とした！

交互に首を倒して行く。絶え間なく再生を繰り返す首。

再生により、動きが止まったその時、ヨハネはヒュドラの首にしがみつき、よじ登る。

ヒュドラはそれを見て振り落とそうと体を揺らす。

ヨハネは七星剣をヒュドラの首に突き刺し、振り落とされまいと必死でしがみ付いている。

ヒュドラは樹に激突し、頭を強打した！今がチャンス！

そう感じたヨハネはヒュドラの光る目にめがけて剣を突き刺した！！

ギヤアアアアアアアアアア！！！！

ヒュドラの叫び声が轟く。ヨハネはヒュドラの目の中に手を突っ込んだ！

取り出したのは地の宝玉だった！

その瞬間にヒュドラから、言葉ではない心の声が聞こえてきた。

「ヨハネよ・・・、ありがとう・・・。」

永久の豊穣、暖かき父の背中・・・。貴方に授けます・・・。」
ウロボロスは最後の力を振り絞って伝えた。

ヒュドラに生氣がなくなり、身が朽ちて、白骨化し、

骨は風に流されて消えていってしまった・・・。」

「よつしゃああああ!!」

隊長は声を上げた。無線連絡が入る。

『隊長！モンスター群が次から次へとチリに変わっていきます！
街からモンスターがいなくなりました！親玉を倒したんですね！』

「そうか！おい、青いの、この国は救われたぞ！大勝利だ！」

「やったね！ヨハネ！」

「ああ！」

ヨハネは喜んだ。しかし、その内面にはウロボロスへの哀愁もあった。

一体だれがこのようなことを・・・。

そうおもいつつ、三人はへりに乗って街へ戻っていった。

街中は歓喜に満たされ、街の人々は祝杯を挙げた。

その裏側、ヨハネは裁判を受けることになったが、今回の大役で無罪放免。

完全に解放されたのであった。その後、パレードが開かれ、二人は楽しい時間を満喫した。

次の日、新たな宝玉を捜しに旅立つ二人。

その前に、警部に別れを告げるため、警察署へ向かった。

平和になったお陰で暇でしょうがない警部をちょうど見かけ、声をかける。

「そうか・・・、もう行っちゃうんだな。」

「いろいろとお世話になりました。」

「いや、オメエさんはこの国を救ってくれた英雄だ。助けられたのはこっちのほうさ。」

国民はおめえさんの活躍をあまり知らんがな。ハッハッハ！」「いいんです。みんなが幸せになってくれるだけで、僕も嬉しいです。」

地の宝玉を手に入れたヨハネはどこか、人間の温かみが生まれていた。

そう感じるエレミアであった。

「またあおうな。」

「はい。」

警部はグッドポーズをして強くヨハネと握手した。

そのあと、エレミアにも握手した。

「いったあゝい！強く握りすぎ！」

「ハハハッ！すまん！」

横にいた隊長とも別れの挨拶をした。

「青いの、またな！楽しかったぜ！」

「また逢いましょう。」

そういつてヨハネとエレミアは次の目的地を探すため、旅立つのであった。

第四章 サイバーティックスカイ

《第四章》サイバーティックスカイ

無事、地の宝玉を手にしたヨハネは、次の宝玉を探すために、再び博物館へ戻ることにした。

待つてました！と言わんばかりのノーム館長。

「ホッホ、良くぞ無事で。それにかわいい嬢ちゃんまで。すみにおけないのう。」

イヤらしい目つきでヨハネを見る館長であった。二人を館長室へと連れて行く。

フワフワの黒い椅子に座る。助手のピクシーがケーキと紅茶を運んでくる。

今日はチヨコレートガナツシュだ。エレミアは感激した。

「わあ〜！美味しそうなケーキ！いただきます！」

そんなケーキに目もくれず、ヨハネは約束していた地の宝玉を手に取り出した。

ノーム館長の目がくぎづけになり輝いた。

「ほうー……、これが地の宝玉か……。まさしく生命の塊じやのう。」

ヨハネは地の宝玉を手に入れた道すじを語った。

「そうか……。そこには大きな白き蛇が守護をしとったわけじやな……。

だがしかし、一体誰がそんな悪さをしたのじやろうか……。

宝玉の守護神を支配するほどの力を持つ者……、

裏にはでかい何かがあるようじやのう……。」

ヨハネは手を組んで考え込んだ。館長は言った。

「キミが始めてワシと出会った頃に話してくれた時、火の宝玉を手に入れたドラゴンが語った、あの滅亡の使者じゃったかのう。」

おそらくそいつが黒幕に違いないじゃろうて。」
少し間を取ってエレミアが館長に、宝玉について何か知ってないか聞いてみた。

「おじいちゃん、私たち次の宝玉を探したいんだけど、手がかりがつかめなくて、困ってるの。なにか心当たりはない？」

「そうじゃのう……、」
館長は目を閉じて記憶を探る。じっと待っているうちに、どこから変な音がしはじめた。

「……ふがあ、……ふがあ」
ピクシー助手が館長の肩を揺さぶった。

「館長、おきてくださあ〜い。」
イライラするエレミア。

「もー！」
「ああ……、すまん、つい眠ってしまったわい。」

そうじゃ、そうじゃ、確か……、ワシんこの博物館で警備をやっとる

レオンって言うやつがの、ドイツで変なものを見たと言った。った。

その時に偶然カメラで撮影した写真があったはずじゃ。

ちよつとピクシーちゃん、持ってきてくれんかの？」

「わかありいましたあ〜。」

そういつてピクシー助手は写真を探しに行った。その時である！
ノーム館長が助手のオシリを触ろうとした。

それを見逃さなかったエレミアはケーキを食べ終わったフォークを持って、

館長の手に投げ飛ばした！

グサツ！

「ギヤアー！痛い！」

「おじさんのヘンタイ！」

館長の悪さはこれで二度目である。懲りないジジイだ。

ヨハネは紅茶を片手に持ちながら、面白おかしく笑っている。

ピクシー助手が手のひらサイズの写真を持ってきた。

なにやら、ドイツの街中で立ち並ぶビルの上空に、生き物が写っている。

みんなは興味津々に覗き込む。ヨハネは生き物を指差して言った。

「ここに一匹の動物がいるようだけど……。」

「ピントがボケてハッキリと見えんが、

警備のレオンは『鷹のようなライオンだった』と言っておった。

エレミアは何かを思い出してピンときた。

「それってたぶん、グリフオンのことじゃない？」

「グリフオン？」

「うん。むかし、おばあちゃんに古い本を読んでもらった時に登場したの。」

『風を操りし、気高き翼。選ばれし運命の使者を待たん』って

ね。

「ホホウ、風を操りし……か。」

もしかしたら、風の宝玉にかかわるものかも、知れないのう。」

ヨハネは写真を手にもって目の近くまで持ってきてよく観察した。

「グリフオン……か……。」

館長が話しかけた。

「ドイツへ行くにはここから遠いのう。」

飛行機でいくとよいぞ。どうじゃ？確かめに行くかの？」

「そうですね。少しでも何か手がかりになるものが掴めれば……

「。」「
「そうか、そうか。じゃあワシの助手であるピクシーちゃんが、
空港までベンツで送るから、行って来るといいぞ。」

そう言うと、館長は助手に飛行機チケットを二人分用意するよう
に頼んだ。

ピクシー助手は笑顔でうけ答えた。

「わあかりましたあ〜！」

エレミアはチケットについて質問した。

「おじちゃん、今すぐにチケットとれちゃうの？」

飛行機って予約しないと、とれないんじゃないの？」

「ホッホ。心配には及ばんぞい。ワシはこうみえても顔が広いん
じゃ。」

そう聞いたエレミアは安心した。

ピクシーはデジタル電話機を使って、航空会社に電話した。

チケットの購入手続きがおわり、電話を切った。

「かあんちようく、手続きが終わりましたあ〜。」

「うむ、ご苦労じゃ。」

ヨハネ君、エレミアちゃん、今から出発できるようじゃが、ど
うするか？」

ヨハネは次の宝玉を目の前に、待ちきれない様子だ。

「今すぐにでも・・・！」

「やったー！飛行機だ！」

エレミアは、はしゃいでいる。生まれて初めて乗るらしい。

助手のピクシーは先に車を用意しに行った。

後から三人は博物館の前で、停めているベンツに乗り込んだ。

その時、どこからか若い男の記者がやってきて、頭を下げて取材
を始めた。

「ちよーっ、とっつとっつと、すみません！いまからどちらへ向かわ
れるんでしょうか？」

館長は答えた。

「ホッホ、いまから家族旅行じゃよ。もう出発するからの、じゃあな。」

そういつて、車は出発した。

車内は快適だった。

エレミアとヨハネは、いろいろな種類の小粒の

チョコレートをつまみながら、会話を楽しんでいる。

ピクシーはラジオをつけた。

華やかな音楽のあと、ロック系のオープニングとともに、ラジオ番組が始まった。

なにやら、世界の超人というテーマらしい。司会の男性が語る。

「はあ〜い！みなさん、ごきげんよう。世界の超人のお時間がやっつて参りました！」

今日ご紹介するのは？なあ〜んと、ドイツのロボット科学者、カール君です！

彼は小学生でありながら、な、な、な、な〜んと！

ノーベル化学賞を持っている超〜〜、天才少年なのであります！！！

そのカール君が今日、スタジオに来ております！こんにちは！

「こんにちは！」

カールと呼ばれる少年の声は無邪気で明るい。司会はカールに質問した。

「カール君の自慢できるところはズバリ、なんでしょう？」

「僕は核燃料を使わずに永久に作動するロボットが作れちゃうんだ。」

プログラミングでは、つくれないものはないよ！」

「それはすごい！そうなんです、カール君は国に認められた小学生なので！」

その能力はいま、ドイツの国の軍事施設などに役立っており、

「去年はノーベル化学賞を受賞したIQ280の天才少年なのです！」

『ちよつと照れるなあ・・・。』

『カール君は今もなお、ロボット科学の研究にいそしんでおります！』

ささ、カール君、最後にメッセージをどうぞ。』

『は、はい。』

世界中のみんなに僕の力が役に立つようにがんばります！応援してください！」

『はいっ！このラジオを聴いて下さっている皆様！』

ぜひ、カール君を応援してあげてくださいね！！』

それでは、短い時間でしたが、またお会いしましょう！』

今日の超人は、天才少年カールくんでした〜！さようなら〜！』

ラジオスタジオ内で拍手がっさい。エレミアは笑った。

「はははっ！こんなの、やらせに決まってるわ！」

番組が終了したところに、ちょうど空港へたどり着いた。

搭乗口は地上からかなり高い位置に存在している。

最先端技術が発達した空港である。ノーム館長は言った。

「さあ〜、着いたぞい。ここから飛行船にのってドイツへ渡るのじゃ。」

カウンターでサインをすれば、すぐに乗れるぞい。」

ヨハネは頭をさげた。

「有難うございます。何度も手伝ってくださって。」

「気にすることはないぞい。ワシとキミはお友達じゃからのう。」

また宝玉を手に入れたら、顔を出してくれんかの？」

「わかりました！では、いってきます！」

ピクシー助手は手を振って挨拶をした。

「いってらっしゃあ〜い。気をつけてねえ〜。」

エレミアとヨハネは車から降りて、二人に手を振って搭乗口へ向

かった。

空港に入るとパステル調の青いグラデーションが一面に彩り、心を落ち着かせてくれる。

早速、カウンターにてサインを行った。

搭乗口の案内をもらった後、二人は筒状のエレベーターに乗った。

そこから見える景色はとても素晴らしいものだ。

三階に降りた先には搭乗口が見える。そこには一人の客室乗務員の女性が待っていた。

「こちらです。」

目の前には空港内と同じ色のやさしい青い色をした機体があり、それはまるでツバメのようだった。三十人くらい人が乗れる旅客機だ。

動力であるエンジンはなく、風の力を利用した乗り物らしい。

ヨハネとエレミアは乗り込んだ。

座席にすわり、シートベルトを装着した後、「出発します」とアナウンスが放送される。

風の音がなびくと同時にゆっくりと静かに前進した。ヨハネは窓際の景色を眺めていた。

エレミアは高所恐怖症だったのを思い出して、固まってじっと沈黙している。

次第に旅客機は速度をあげて、ドイツへ羽ばたいた。

機体はまるでゆりかごのようで、二人はいつの間にか、ぐっすりと眠っていた。

「まもなく、ドイツに着陸します。」

そうアナウンスが耳に入ったヨハネは、エレミアの肩をゆすって起こした。

ゆっくりと着陸した後、シートベルトを外して飛行機をおりた。

「ご利用有難うございました」

そう客室乗務員の挨拶を聞いた後、二人は空港を離れた。

「ここがドイツか・・・。」

ヨハネはあたりを見渡した。地面から無数に生えているビル郡。タイヤのない車。いくつもの監視カメラ。そこはまるで機械の都市のようだ。

ヨハネは例の写真を思い出し、上空をしてみるが、灰色の空気と新鮮味のない雲が浮かんでいるだけだった。

エレミアはヨハネに話しかけた。

「あの写真だけじゃ、みつけないよ。」

そういえばさ、ラジオで言ってた天才少年のこと、ちょっと気になっちゃって。

せつかくドイツに来たんだから、大学によってみない？」

「そうだな、なにか手がかりが掴めるかもしれないし、いつてもらった。」

あそこの案内所で場所を教えてもらおう。」

そういつて二人は駅の街の案内人に話しかけ、大学の場所を教えてもらった。

大学へはバスで行けばすぐのようだ。

二人はバス停へ向かう。この街のバスの潤滑はスムーズで、五分に一本来るほどだ。

バスには車輪がなく、地面から少し浮いている。

スペインから乗ってきた飛行機と同じように、風の力が動力のようだ。

二人はバスに乗り込んだ。中にはお客さんが何人か乗っていた。

勉強に必死になっている大学生、おばあちゃんに付き添っている女形アンドロイド、

軍人らしい男の人が四人。

ヨハネはグリフォンがどんな奴なのか、頭の中で妄想しながら、バスの窓から見える街並みをただ呆然と眺めていた。

やがて、終点の大学までたどり着く。

二人はバスを降りてアストラル大学へと足を運んだ。見慣れない二人を学生たちはものめずらしげに見る。

大学の景色は、意外にも自然と一体になっている。

まるで妖精が出てくるかのようなお花畑や、森林浴ができそうな場所が設けられている。

エレミアはワクワクしながら大学の事務員からパンフレットをもらい、

ページをめくってみていた。その中には、あの天才少年カールの写真が載っていた。

「あ！この子だよ！ラジオで言っていた、カールっていう男の子！

工学部かあ、多分そこにいるかもしれないから、行ってみようよ！」

ヨハネはうなずいた。二人はパンフレットについている地図を頼りに工学部へ向かった。

工学部は一階の中央付近にあり、院内では一番広い区画である。

どうやら、アストラル大学はロボット工学に力を入れているらしい。

パンフレットには、様々な賞を受賞している学生が紹介されている。

二人が工学部に近づくにつれ、大学の内装が徐々にメカニカルな雰囲気に変わってくる。

やがて、工学部に到達したものの、鋼鉄のドアが重々しく閉まっている。

扉を開くにはカードキーが必要であるようだ。エレミアはとても残念がって愚痴をこぼした。

「あゝもう、せつかく来たのに、カードキーがないと入れないなんて……」

「とつてもシヨック……。」

すると、そこへ一人の大学院生がやってきた。

メガネをかけてひよろつとした、若い男の人だ。

「キミたち、見ない顔だね。いつたい、ここで何をしているんだい？」

ヨハネは答えた。

「僕たちはカール君に会うため、ここにきました。」

でも、カードキーが必要みたいで……。カール君に合わせて欲しいのですが……。」

大学院生はメガネをクイッと持ち上げて、少し愛想の悪い口調で言った。

「キミたちのような人が、カールくんに会えるとも？」

ここはエリートが集まる大学なのだよ。場所をわきまえて欲しいものだ。」

遊びに来ているなら、さっさと帰って頂たい。」

エレミアは院生につっかかった。

「なによこいつ！ちよつと頭がいいからって、馬鹿にしないでよ！」

エレミアと大学院生がもめそうになった時、少年の声飛び込んできた。

「ねえねえ、きみたち、なんか楽しい事でもしているの？」

みんなは声のする方へ振り向いた。そこにはあの天才少年、カールがいるではないか。

見た目は普通の小学生のようだ。

白い髪のショートボブ、体にはいろんな工具がぶら下がっており、首にメカニックなゴーグルをかけている。とつても無邪気な性格であるようだ。

大学院生はカールに言った。

「カール君、この一般市民が君に会いたいと言っているんだ。」

この大切な説明論議会の時期に、のんきな輩に付き合っている

暇なんてないのに。」

エレミアは大学院生に向かって牙をむいて、にらみつけている。

カールは、にこやかな笑顔で答えた。

「ピリピリしたっていいものなんて出来ないよ。」

たまには楽しく時間を過ごすのもいいんじゃないかな？」

カールはヨハネとエレミアの顔を見て、

「僕のために会いに来てくれてありがとう。せっかく来たんだし、いっしょに遊ぼうよ。」

と言った。

ヨハネは自己紹介をした。

「僕はヨハネといいます。」

エレミアはカールと握手して挨拶した。

「わたしはエレミアだよ！よろしくね！」

「うん！よろしく！僕はこの工学部で研究しているカールっていうんだ！」

三人が楽しそうにしているなか、大学院生は言葉を残して去っていく。

「カール君、僕はもういくから。じゃあね。」

カールはヨハネとエレミアの事が気になって、夢中になっていたためか、

大学院生の言葉が耳に入らなかった。大学院生は舌打ちをして、去っていった。

カールは二人に自分の製作したロボットを見せたくてしようがなく、

研究室に連れて行くことにした。

「僕の作ったロボットを見せてあげるよ！ついてきて！」

「みたい！みたい！ヨハネもみたいよね？」

「ああ、ちよつと興味があるな。」

工学部のドアを開けるため、カールは音声認識と虹彩認識を行った。

チェックが確認できたあと、カードキーを通す。扉がズズつと開く。
三人は奥の研究室へ向かう。研究室の扉にも、同じようなセキュリティシステムがあった。
チェックをして扉を開く。

研究室の中はまるでロボット工場のようにであった。
数名の白衣をきた科学者が熱心に研究を行っていた。
カールは自分の製作したロボットを二人に見せた。

ありふれた人形ロボットから、動物や昆虫をモチーフにしたロボットなど様々だ。

カールは自慢げに語り始めた。

「どうだい？すごいでしょう！これらはみんな僕がデザインしたロボットなんだよ。」

動物や昆虫の性質を研究すると、素晴らしいヒントが得られるんだ！」

工学部はロボット研究の出だしは一般家庭用アンドロイドや生活に役立つ機器を開発していたが、最近は軍事に力を入れており、

戦闘用のロボットを研究し始めた。

エレミアは機関銃やビーム砲がつけられているロボットに少し恐れを抱いていた。

「な、なんかすごいね。こんなのが襲ってきたら怖いなあ・・・。」

カールは笑った。

「ははは、大丈夫！いまは稼働しないよ。」

それに勝手に人へ攻撃を仕掛けるようなプログラムは組んでないし、

万が一と言う時は強制的に作動を停止させられるんだ。」
そこでヨハネが質問した。

「どうして戦闘ロボットがあるんだい？」

「最近になってから、国の軍事施設から要請があつてさ、なにやら、」

未確認の組織からロボットによる攻撃があつたらしいんだ。

それで僕の能力とアストラル大学工学部のみんなの力で研究、開発をしてきたわけなんだけど・・・。

本当はロボットにこんな持たせるの、いやなんだ・・・。

少し悲しげに表情を見せるカール。彼の純粋な心には重たい石のようだった。

そのとき、カールはヨハネの七星剣をみて興味を持ち、気分が一变した。

「ねえ、ねえねえ、ヨハネ君の持っているのってなに？」

「これは僕の代々に伝わる家宝の七星剣って言うんだ。」

「ちよつとみせてよ？だめ？」

「え、ああ、いいよ。」

「やったあ〜！」

ヨハネはカールに七星剣を渡した。カールはいろんな角度から何度も七星剣の刀身を眺める。

「すごい・・・！」

この流れるような刀身、それにこの電子回路、

古代で作られた剣とは思えない技術が使われてそうだ・・・。

う〜ん・・・まてよ・・・。」

カールは何かが頭に引つかかった。

数分の間、知識の山積みになった記憶の積み木から一つのカケラをつかんだ。

「・・・そうだ！この剣、何処かで見覚えがあるとおもったら・・・！

ちよつとついてきて！僕の研究室にあるんだ。」

そついいながら、七星剣を持ったままカールは自分の研究室へ走っていった。

ヨハネとエレミアはカールを追いかけていく。

薄暗い研究室。明かりをつけると、無数に散らばる本や、作業台、工具が散らばっている。

カールは七星剣を冷たい作業台に乗せた。

レポートや本が山積みになっていく机の引き出しを開けて、中から古びた宝箱のようなものを取り出した。

宝箱のふたを開けて、なかに入っていたものを取り出して並べ、カールは語る。

「昔ね、エジプトへ旅行に行ったとき、考古学者のおじさんからこの宝箱をもらったんだ。

そのときの物がこれ。中に入っている物は設計図と謎の部品なんだけど、

設計図をみてみてよ！これって七星剣だよね！」

「ほんとだ・・・」

ふと、ヨハネは考古学者のおじさんの事が気になったが、遠慮して聞くのをやめた。

エレミアは設計図の文章を読んだ。

「『七星剣の新たな力、選ばれし知力の賢者によりて開花せん』って書いているよ。」

カールは言った。

「うーん。設計図を見た感じだと、刀身にもう一つソケットと呼ばれるものが

取り付けられるみたいなんだ。」

ヨハネは設計図を眺めながら言った。

「新たな力、か・・・」

カールは真剣なまなざしでヨハネに問いかけた。

「ヨハネくん、僕はこの七星剣のグレードアップに手がけたい。

更なる力が得られるために、僕の力で七星剣を進化させたい。

完成させる自信はあるけれど、失敗すれば壊れるかもしれない。

僕に七星剣を預けるかどうか、ヨハネくんの答えを教えてください。
い。」

ヨハネはとても悩んだ。それもそのはず、父親からの誕生日プレゼントであり、

家宝でもあるため、壊れる事に恐れを感じていた。

ヨハネは答えた。

「今夜、一日だけ考えさせて欲しい。だめかい？」

「いいよ！わかった！急にこんなことになってごめんね。」

でも、ヨハネくんの力になりたいんだ。

何かこう、ロジックには存在しない、運命的なものを感じるから……。

ヨハネくんの答え、待ってるね！」

そういつてカールはヨハネに七星剣を返した。

そこへちようどチャイムが鳴る。予定の時間が迫ったカールは二人にあやまった。

「あゝあ、もうこんな時間。ごめんね、これから研究会があるんだ……。」

僕は行かなくちゃ。とっても楽しかったよ！今度は何かして遊ぼう。

そうだ、とまるところがなかったら、大学寮を一部屋かしてあげるよ。

さつき、事務員さんにデータを送ってOKが出たから、そこで休むといいよ！」

ふたりは「ありがとう。」とお礼を言った。

「それじゃあまたね！ヨハネくん！ミアちゃん！」

カールは何枚かの束になったレポートを持ち出して、研究室から飛び出して行った。

二人はカールに手を振った。

教えてもらった寮は大学と一体化している。そこへ二人は足を運ぶことにした。

ついた寮は一部屋四人で生活できるスペース。

ヨハネはベッドに座り、七星剣を抱えて考え込んでいた。

果たして彼に託すべきであろうか。エレミアはヨハネの顔を覗き込んだ。

「まだ迷ってるの？」

「ああ。この剣は父さんからもらった、唯一のプレゼントだから……」

「そっかあ。お父さんのかわりなんだね。ゆっくり、考えればいいとおもうよ。」

あ、そうだ、ヨハネ。おなかすいたでしょ？

途中で売店があったから、何か買ってくるよ。何がいい？」

「そうだな。パスタ系があればいいな。なければ何でもいいよ。」

ヨハネはポケットからお金を取り出し、エレミアに渡した。

「それじゃあいつてくるね！」

「うん。」

エレミアは自動ドアをぐり抜け、売店へ向かっていった。

ヨハネはベッドで横になり、迷っているうちに、いつのまにか眠ってしまった。

夢の中……。初めて七星剣を手に入れたあの夜と同じ夢……。

そしてあの祭壇。おなじ場面が再現される。ヨハネが一目ぼれをした女性が現れた。

何処かで見覚えがある……。懐かしい匂いもする……。ヨハネは話しかけた。

「僕は悩んでいます。七星剣の新たな力、臨んでいいのでしょうか……？」

美しい女性は笑顔で答えた。

「貴方は……。私が傷つくことを恐れているのですね……。

でも、心配なさらないでください。あの子は神様がご計画なさ

れた運命の御子。

あの子の奇跡の力を信じてあげてください……。
滅亡の使者の力が次第に強まっています。

それに打ち勝つためには、七星剣の更なる力を得なければなりません。

なにもおそれないで……。」

ヨハネは目をつむって答えた。

「……わかりました。カールくんに託します。」
美しい女性はヨハネの頬をなでた。

その瞬間、ヨハネは幼児期の記憶が呼び戻り、何かがヨハネの心を揺さぶる。

だが……、その何かは鮮明に思い出せなかった。

ヨハネは儂い気持ちで美しい女性に向かって問いかけた。

「あなたは一体だれなんですか……？」

「わたしは……。」

声が途中で聞こえない。目の前が真っ白になり、夢から覚めた。

「よはね、ヨハネ。ねえ、ねえ、おきてよ。ヨハネ……！」

エレミアの声がする。ヨハネの目が開いた。

「うつ……。ごめん……。いつの間にか眠っていた。」

「ご飯、買ってきたけれど、なんと呼びかけても起きてくれないもん。」

ちよつと心配したよ。……？ヨハネ、怖い夢でもみたの？」

ヨハネの目には少し、涙が溜まっていた。夢のせいだろうか。袖で涙をぬぐう。

「うつん。気にしないで、大丈夫だよ。」

「そう？それならいいけど。あ、そうだ、カルボナーラがあったよ！」

私も同じのにしたんだ。たべようよ……！」

「そうだな、たべよっか。」

二人はパッケージを開いて食事し始めた。

ヨハネは三、四口食べると、エレミアに話しかけた。

「エレミア、僕は……」

「うん？」

エレミアは突然のヨハネの問いかけで、愛の告白かと勘違いした。

「（も、もしかして、私のこと……。そんな、急に……。キヤア。）」

みつめあう二人。エレミアはドキドキしながら、一人で妄想を抱いている。

ヨハネは続きを言った。

「僕は……。七星剣をカールにグレードアップしてもらうことに決めたよ。」

「（ガン！）」

椅子ごとこけるエレミア。

「だ、大丈夫……？」

「う、うん。」

エレミアは心の中で泣いた。ヨハネは不思議がってエレミアを見ていた。

「あ、あはは、そうなんだ。決めたんだね！（私ったら、何考えているんだろう）」

「うん。これから先、待ち構えている敵に対して更なる進化が必要なんだ。」

僕はカールを信じるよ。」

「私もカールくんなら必ず成功してくれるとおもつよ！」

それじゃあ、ご飯を食べ終わったあと、カール君の研究室にいらおうよ！」

「ああ！」

二人は楽しく雑談をしながら食事を済ませた。お腹がいっぱいになった二人。

すこし休憩を取るためにトランプでババぬきをして遊んだ。

休憩が終わったあと、二人は寮をでて、カールの研究室に向かう。

途中でエレミアがハツと思い出して立ち止まった。

「あ！いけない！カール君の研究室に入るためにはカール君がいないとダメなんじゃ……。」

「そうだった……。でも、あそこまで行けば、また会えるかもしれないよ。」

「そうだといいんだけど……。」

二人は再び歩きだした。

工学部の入り口にたどりついたが、カールはいないようだ。

ヨハネとエレミアは椅子に座って、どうしようか考えていた。

ちょうど、工学部のドアが開き、タイミングよくカールがあらわれた。

「あ！やっぱり、僕のこと待っていてくれてたんだね！」

エレミアは「カールくん！」と呼びながら椅子から飛び寄った。

ヨハネは七星剣をカールに差し出し、お願いした。

「カール、七星剣のグレードアップをお願いしたい。できるかい？」

カールはその返事を待っていたかのように、

「わかった！ヨハネくんがそう言うのと信じていたよ！」

だから僕もヨハネくんの期待に添えて、全身全霊で取り掛かるよ！」

「ああ！たのんだよ！」

ヨハネは七星剣をカールに渡した。

「完成は明日の朝までかかるかもしれない。二人は寮で待っていてね！」

「うん！」

カールは自分の研究室にこもった。真剣な目になり作業に取り掛かる。

ヨハネとエレミアは再び寮に戻ろうとした、その時、二人を呼び

止める男の音がする。

声のするほうを向くと、そこには教授らしき人が立っている。男の人は話しかけた。

「こんにちは。始めまして。私は工学部の教授をやらせてもらっています、カーフと申します。」

短髪で細い目をしており、清楚で優しい感じの男の人だ。二人は挨拶した。

「こんにちは。」

「ちよつとお話をしたいのですが、お時間はありますか？」

「どうぞ。」

三人は椅子に腰掛けて会話を始めた。カーフは語り始めた。

「実は私、カールの父親のような存在でして。」

カールがまだ幼稚園に通っていた頃、交通事故に遭ってしまいました。

最先端の技術により、命は取り留めましたが、体の大半は人工的に作られているのです。

サイボーグ化したカールを見たご両親は化け物扱いし、捨ててしまったのです。

そこで私が彼を受け入れ、一緒に暮らしてきました。」

「そうだったの……。」

エレミアはしんみりする。

「お二方がカールと友達になってもらって、私は感謝しております。」

「どうか、ずっと友達でいてあげて欲しいのです。」

エレミアは教授の手を握った。

「わたし、カールくんのこと大好きだよ！ね、ヨハネ！」

「そうだね。カールは素直で頭のいい子だよ。」

「そういつてもらえると、私はとてもうれいす。」

何より、本人が一番うれいでしょう。これからもカールをよろしく願いますね。」

どこからか、カーフ教授の顔からは哀愁が漂っているかに見えたヨハネだった。

カーフは腕時計をみて、次の講義に向かうことにした。

「すみません、そろそろ私は時間ですので、行かなくてはなりません。」

またお会いできるといいですね。お話を聞いてくださって、有難うございました。」

「またね！」

二人はカーフに手を振った。

「私たちは寮に戻っていよつか。」

「そうだな。」そう言って二人は寮に戻った。

時は過ぎて行き、夜になって二人は眠った。

カールは七星剣のグレードアップと戦っている。

研究室の扉には、立ち入り禁止の看板がでかく立てかけられている。

翌朝、気持ちよく眠っているヨハネとエレミアのもとへ、カールが元気よく飛び込んできた。

「ヨハネくん！ミアちゃん！おきて！七星剣のグレードアップが終わったよ！！！」

エレミアは手で目をこすりながら、あくびをする。少々、寝起きで機嫌が悪い。

「うーん、なあに？朝っぱからうるさいわね……。」

ヨハネは飛び起きた。

「七星剣が？！カール、本当か！！！」

「うん！グレードアップは大成功だよ！ほら！」

カールはヨハネに七星剣を返した。

ヨハネはまるで、父親に新しいおもちゃを買ってもらったときの幸福感を表して、

進化した七星剣を眺める。刀身にソケットが一つ追加されている。ヨハネはお礼を言った。

「カール、ありがとう！君は本当にすごい！」

「ううん！こんな貴重な経験をした僕のほうが、お礼を言いたいくらいだよ！ありがとう！」

エレミアは寝ぼけた頭を振りほどき、ようやく状況をつかんだ。

「完成したんだね！おめでとう！」

「ありがとう！」

カールは設計図に添付されていた古文書を思い出し、ヨハネに説明した。

「そうそう、設計図にはまだ、こんなことが書かれていたんだ。

『進化を遂げた七星剣の新たな器に、力の源をささげよ』

これだけは解読できなかったんだよね。ヨハネくん、わかるかい？」

すると、ヨハネは宝玉を取り出してカールに見せる。

「うわあ、すごい球体だね……。きれいだなあ。」

キャンディーみたいでおいしそうだね……。」

「この宝玉を使うと、七星剣の形が変わって能力を使えるんだ。」

ヨハネは水と地の宝玉を七星剣のソケットにはめ込んだ。

七星剣の姿は見る見るうちに変化し、古代樹の剣になった。

剣からは、とてつもない生命力を感じる。

カールは古代樹に変化した七星剣の刀身をなでた。

その瞬間、作業時につけてしまった傷だらけの手が、あつという間に回復した。

「傷が消えてる……。あつたかいな……。なんだか眠くなってきたかった。」

エレミアは気遣う。

「カールくん、ずっと徹夜していたんでしょ？休んだほうがいいよ？」

カールは一気に眠気が襲い掛かり、思わずあくびをした。

「ふあゝ。そうだね。疲れちゃったあゝ。」

そういうと、フラフラしながら、エレミアのベッドで眠ってしまった。

満足げな顔をしながら、カールはいびきをかいて気持ちよく眠りについた。

それを見た二人は、微笑を浮かべた。

朝ごはんを食べるために、二人は食堂に行ってみることに。

まるでレストランのような広さの食堂には大勢の院生や学生達がひしめいて、にぎやかだった。

食券を購入して、朝食Aセットを持ちながら、二人分のあいている席に座った。

エレミアは朝食を見て話しかけた。

「おいしそうなスープだね。あう、私の嫌いなニンジンが入っているよ。」

エレミアはニンジンをスプーンで避けていた。

そのとき、食堂の大画面で流れるテレビにニュースが飛び込んできた。

『臨時放送です！只今テロリストとおもわれる男から強迫の映像が送られる模様です！』

ニュース番組の映像が切り替えられる。一人の覆面をかぶった男が映った。

上半身がうつっており、バックには頭蓋骨のイラストが描かれている。

ボイスチェンジャーで変えられた低い声で、覆面の男は喋りだした。

『おはよう、諸君。私は滅亡の使者のしもべの一人、ハデスだ。』

ヨハネは滅亡の使者と聞き、まさか！と思い、フォークを置いて彼に注目した。

『これから、この国にある軍事施設の全てのシステムを乗っ取り、

世界を破滅へと導く、シヨールを開幕させよう。

さあ、諸君らよ、絶望するがよい。

滅亡の使者によりて、永久の苦しみが開放されんことを。アーメン。』

そういうと、覆面の男は手に小型端末のような物をあらわに見せて、

オーバーにスイッチを押す。次の瞬間、テレビの映像は途切れ、カラーバーが表示された。

学食堂にいるみんながざわめく。

何も起こらない状況からして、単なるイタズラにすぎないのか、そう思っていた。

「滅亡の使者……。覆面の男は何をしたんだ……。」

ヨハネは嫌な予感がしてならなかった。その時である。

サイレンが鳴り始め、大学全体にわたる放送が流れた。

ピンポン パンポン

『緊急避難勧告！直ちに地下シェルターへ避難してください！

繰り返し連絡します！大学にいる者はみな地下シェルターへ避難してください！』

あたりの空気が一変として、一斉にざわめき始め、人はみな混乱状態に陥った。

連続する足音を立てながら、走って逃げる学生達。

ヨハネとエレミアは食事を途中でやめた。

院生や教授らは学生達へ地下シェルターの道を教えている。

ヨハネは女性の院生に問いかけた。

「一体何が起こったんですか？」

「わ、私にも分かりません！軍からの避難勧告が来たようです！

混乱回避のためにいまはシークレットだそうです！」

ヨハネとエレミアは走ってカールのいる寮へ戻る。

「あつ、きみ！そつちは学生寮！方向がちがうわよ！」

「寮にカールくんがいるの！」

そういつて、急いで走っていった。

寮にたどり着いて、部屋の扉を開くと、すでにカールは起きていた。

小型のパソコンを持っており、何かを調べていたそうだ。

「ヨハネくん、ミアちゃん、大変だよ！機密情報をのぞいてみたら、

軍事施設のすべてのセキュリティが破られて、殺傷能力の高い戦闘ロボットが

遠隔操作で支配されているみたいなんだ。

もうすでに街に出ていて、人を襲っているらしい。」

「そんな……。」

エレミアは胸に痛みを感じた。街の人々を助けようとヨハネはカールに言う。

「カール、僕は戦闘ロボットを破壊しに行く。

カールとエレミアは地下シエルターへ避難するんだ。」

カールは戦闘ロボットの脅威を想定し、ヨハネの行動を否定した。

「だめだよ、ヨハネくん！」

戦闘ロボットに使われている金属は特殊で、銃弾でもびくともしない。

一筋縄ではいかないんだ！

それに軍事施設に収容されている戦闘ロボットは何万ともあるんだ。

絶対に不利だよ！」

ヨハネの目つきが鋭くなる。七星剣を見ながら喋った。

「……僕は、やらなくちゃいけない。

滅亡の使者を絶対に許すわけにはいかない……。

宝玉を託した守護神たちが、世界の平和を守ってくれと命を賭

して僕に願ったんだ。

その願いを叶えなくてはならない！

だから、僕は戦いに行く。二人は、避難するんだ。」
そういうと、ヨハネは飛び出した。カールは叫んだ。

「ヨハネくんのばかあ〜！」

ヨハネがものすごいスピードで走って行く姿を、カーフ教授は目撃して、驚いた。

「い、いまの、カールの友達じゃないか。二人とも、シエルターへ避難するんだ！」

カールは泣きべそをかきながら、教授に言った。

「お父さん……、ぼくね、ヨハネくんを助けに行かなくちゃ。

だから……！ぼくの最高傑作のロボット、『ラグナロク』の起動を手伝って！」

「カール……。わかった。でも、私もついていくよ。カールが心配だから……。」

「うん！ありがとう！」

エレミアはすこし、のけ者にされたような気分だったが、自分もついてくと主張する。

「わたしもいくよ！私の王子様に傷ひとつ、つけさせないわ！」

「うん！」

三人は走ってラグナロクの元へむかった。

そのころ、ヨハネは大学を出て既に中央街にいた。

空中には目玉型の監視ロボットが迂回しており、人間を見つけるたびに、

車の四台分の大きさに匹敵するほどの戦車型のロボットを呼ぶ。

バルカンやビーム砲、ミサイルを放って人々を襲う。

ほかに、カニをモチーフとされて作られた巨大なロボットは、

ペンチのようなハサミで建物をぶつ切りにしている。

男の子とその母親が、二足歩行のガトリングガンが装着された口

ロボットに襲われている。

その様子を目撃したヨハネは助けに飛んで行った。素早く七星剣に地の宝玉を装着した。

七星剣は金剛石、ダイヤモンドの剣となり、ロボットのガトリングを斬りおとした！

すかさず、二段斬りでロボの足を切り落とし、動きを止めた。

「大丈夫ですか？今のうちに早く逃げてください！」

「有難うございます。」

親子は近くの地下シェルターへ通じるエレベーターに乗っていった。

ほっとするのもつかの間、今度は巨大力二のロボットがヨハネに襲い掛かる。

大きな爪でヨハネをつぶしにかかる。ヨハネはテンポよくそれをかわす。

隙を見てカニロボットの脳天を貫こうとした！

カキーン！！

特殊な装甲をしているためか、全く斬撃が通用しない。

バランスを崩したヨハネはカニロボットの巨大な爪で押し飛ばされてしまった。

ファッションショップにマネキンの見えるガラス窓にヨハネは突っ込んだ。

音を立ててガラスが割れる。ヨハネは額から血を流しながらも、懸命に立ち上がるうとする。

カニロボットはヨハネへ照準を合わせると、口から何本もの銃口がでてきて、

射撃体勢に入った。このままではやられてしまう。

その時である！遠くから陽子ミサイルが飛んできて、カニロボットに命中した！

ヴオゴオーローン！！

爆音とともに熱風があたり包み込む。

あの固い装甲を溶かし、あらわにした精密機械を貫通し、カニロボットは爆発した！

スピーカーのような音質で聞き覚えのある声がある。カールだ。

『ヨハネくん！助けにきたよ！』

高さが人の2.5倍ある人型のロボットがヨハネに近づいてきた。ヨハネは立ち上がり、ロボットの方をみた。

カールの最高傑作であるラグナロクは機動性の高い人型ロボットで、

二人ほど乗り込める幅のある胴体。

足は鳥のように、どのような場所においても安定する機構。

右腕には陽子ミサイル発射装置。左腕にはビームカッターと物を掴むための手がある。

肩には自動充填ミサイルポッド。身を守るための特殊金属装甲。

そして、ラグナロクの近くに浮かんでいる小さな機械がバリアを張って守っている。

ラグナロクに乗っていた三人は降りて、ヨハネに近寄った。カールはヨハネに謝った。

「ヨハネくん・・・、さっきはごめんね。」

「いや、僕が悪かったよ。何も考えずに行ってしまった。」

カール教授が言った。

「無事でよかった・・・。ヨハネくん、これからの作戦を教えるから、聞いて欲しい。」

今から軍事施設本部へ行って、施設の中心にあるマザーコンピューターを見つけ出す。

暴れている戦闘ロボットの動きを止めるためには、マザーコン

ピューターの

プログラムを書き換えなければならない。

施設内にも警備ロボットが存在して、襲い掛かってくるはず。それを撃退して欲しい。」

「わかりました。」

「うん。それでは、軍事施設へ向かいましょうか。」

「了解！途中で、ロボットが襲い掛かってきた時は、

ぼくのラグナロクで倒しちゃうから、ヨハネくんは避けていてね！」

「すまない、助かるよ！」

教授とカールはラグナロクに乗り込んだ。エレミアはヨハネの手をつなぐ。

『ミアねえちゃんは乗らないの？』

「私はヨハネのパートナーだから、近くにいたい。魔法でヨハネを守るから、安心して！」

『わかった！じゃあ先を急ごう！』

みんなは軍事施設のほうへ向かっていく。

途中、多くのロボットが襲い掛かってくるが、ラグナロクの過激な戦闘で次々と、

邪魔するロボットを破壊していく。

それに負けまいと、ヨハネは火と地の宝玉で変化させた

マグマのような剣でロボットを倒していく。

倒したロボットの残骸の中には、まだまだ使えそうな部品がいくつかある。

カールはそれらを回収し、部品をつまみ替えて新しいロボットを作ったり、

燃料として転換を行っていた。

湧き出てくる敵ロボットを倒していく中、ようやく軍事施設のゲートまでたどり着いた。

カールは言った。

「よし！ここは強行突破で突っ込んでいこう！えーい！」
掛け声と共に、ラグナロクの機体を鉄の門へぶちかました！
セキュリティシステムもなんのその。

ド派手にきめたカールはスピードを止めることなく、前進するばかり。

その後をヨハネとエレミアはついていく。教授は指をさして言った。

「マザーコンピューターはあの建物の中にある。あそこへ行くんだ。」

軍事施設には各システムにそれぞれエリアとして分けられている。そのうちの一つである、コマンドエリアに全ての戦闘ロボットを操作する、

マザーコンピューターが設置されてある。

カールは教授の顔を数秒みて、教授が目をあわせようとした瞬間、カールは急いで前を見てラグナロクを走らせた。

ヨハネたちはコマンドエリアの建物の前までたどり着いた。
建物の大きな入り口は大人のゾウがそのまま歩いて入れるくらいだ。

監視カメラにセキュリティシステム。

その前に立ちちはだから、黒ヒヨウをモチーフにしたロボットがいる。

カールは注意を促した。

「みんな、こいつは危険だよ！追尾型ミサイルとレーザーライフを備えているんだ。」

特殊なレーダーと感知システムでほぼ百パーセントの中されてしまう。

ヨハネ君にはとても危険だから、ここは僕にまかせて！」

「ああ、わかった！」

ヨハネとエレミアはラグナロクの背中側へ回り、ほかの戦闘ロボットの相手をする。

カールは神経を集中させた。黒ヒョウロボットが襲い掛かってくる！

背中につけたレーザーライフルをラグナロクに向けて発射した！カールはラグナロクのバリアシステムの出力を120%上昇させた。

ズドーーーーーン！

鉄の焦げた臭いと、土煙が立ちこむ……。

ラグナロクの胴体にはススがついているが、なんとか持ち耐えたようだ。

「うっひゃ〜、バリア全開にしていたのにこんなダメージだなんて！

ちょっと面白くなってきだぞぉ〜！」

ワクワクしているカールを見て、教授はちょっと気を引いてしまった。

カールは黒ヒョウロボットの行動パターンを読む。

「あのレーザーライフルはエネルギーを完全に充填しないと発射できないから、

今のうちに攻め込んじゃえば……！」

そういうと、カールはラグナロクのミサイルポッドで黒ヒョウロボットに

ミサイルを撃ち込んだ！

しかし、黒ヒョウは俊敏な足取りでミサイルを上手くかわしてしまっ。

カールはヨハネに援助を求めた。

「ヨハネくん！」

ザコロボットとの戦闘で一時的にキリがついた状態で返事をする。

「どうした？カール？」

「少し、手を貸して欲しいんだ。」

僕のラグナロクは耐久力・破壊力ともに抜群の機能を持っているけど、

黒ヒヨウロボットに勝てる機動力は備えていないんだ。

だから、ヨハネくんの力であいつの動きを封じて欲しいんだ。できるかな？」

「ああ、なんとかしてみる。」

そういうとヨハネは七星剣に地と水の宝玉をセットし、古代樹の剣に変化させた。

ヨハネは地面に思い切り、剣を突き刺した！

すると、地面の中から根っこが生えてきて、コンクリートの地層を割りながら

黒ヒヨウの足元までのびて行き、そこから何本ものツルが生えて黒ヒヨウのボディーに絡み付いた！

必死に逃げようとするが、次第に増えるツルたちが黒ヒヨウを逃がさない。

チャンス！そう思ったカールはラグナロクの全攻撃機能のロックを解除する。

「よし、今のうちだ！ラグナロクの最強攻撃態勢、

アポカリプスを発動しちゃうぞ！いつけえー！！ラグナロク！

カールは掛け声とともに、中央のスイッチを押した！

その瞬間、ラグナロクの装甲が作動して、無数の銃口が現れた。雨のような銃弾が黒ヒヨウを襲う。

ミサイルポッドから全てのミサイルが発射され、

残り一発の陽子爆弾をトドメとして黒ヒヨウに打ち込んだ。

ドッゴオオオオンー！！

ものすごい爆音と黒い煙であたりは包まれた。

徐々に視界が戻ってくると、黒ヒョウロボットは木っ端微塵になつていた。

カールは黒ヒョウロボットの部品を回収しながら、心の中で「こめんね」とつぶやいた。

今の衝撃で都合よく頑丈な扉も破壊できた。教授は言った。

「上手くいったな。これでようやく中に入れる。もう少しだ。先をすすもう。」

ヨハネはラグナロクの方を見て、うなずいた。みんなは奥へと進んでいく。

『シンニユウシャ ハツケン ダタチニ ハイジヨセヨ』

アラートが施設全体に響き渡り、赤いランプで点滅し、目の前は真っ赤に染まる。

幾度も襲い掛かる戦闘ロボットを倒して行き、セキュリティシステムで閉ざされた扉を

ことごとく破壊し、先を突き進んでゆく。

ようやく、ヨハネたちはマザーコンピューターの部屋にたどり着いた。

カールと教授はラグナロクから降りてきた。マザーコンピューターが見える。

360度、どこを見渡してもモニターだらけ。

モニターに映っているのは、街のあちこちに設置されたカメラの視点、

羅列されたコンピュータ言語、戦闘ロボットの細かい説明図など様々だ。

カールは早速、マザーコンピューターへ走り寄り、

小型端末を取り出してコードをつなげ、プログラムの書き換えを開始した。

カールは特殊ゴーグルを装着し、小型端末のキーボードに手をつ

けて、

ヨハネとエレミアに頼んだ。

「僕は今からプログラムの書き換えを始めるから、ヨハネさんとミアちゃんは

戦闘ロボットが来たら、追い出してくれないかな？」

「まっかせてちょうだい！」

エレミアはウインクしてヨハネとともに入り口で待ち構えた。

カールは指が見えないほどの高速タイピングでプログラムを書き換えている。

あつという間に、ロボットの行動プログラムを停止する命令を実行できた。

街中で暴れているロボット達の稼働は停止した。

だが、それが引き金となり、今度は軍事施設にある核ミサイルの発射が

日本を目的地として自動的に設定されてしまった！

別ウィンドウでミサイルの規模を確かめるカール。見る目を疑った……。

「た、大変だよ……。戦闘ロボットはオトリだったんだ……。

最初からこの核ミサイルを発射させるつもりだったんだ。

これを見てよ教授。戦闘ロボットで僕達が踊らされている間に、

核ミサイルの燃料の充填が行われていたんだ。

このミサイルの破壊力は日本全土を丸呑みにしてしまうほどだ……。

絶対に……止めなければ……！」

カールは泣きそうになりながらも、ミサイル発射システムのホストプログラムに

アクセスするが、なかなかセキュリティをやぶれない。

そこでカールはすぐさまウィルスプログラムを思いつき、作成し始めた。

一分もかからないうちに、完成したウィルスをホストへばら撒い

た。

セキュリティは混乱し、ホストプログラムに進入できたカール。しかし、その瞬間、教授の顔つきが変わった。

教授は手に持っていた小型端末のスイッチを押した。

どこからか、人間型のロボットが2体でてきて、カールを拘束した。

「おとうさ・・・、教授・・・？これは一体どういうこと？」

「悪いな、カール。我が主の計画を止めることは出来んのだよ。」

ヨハネとエレミアは事態が変化したことに気がついたが、もう遅かった。

後から来たロボットに二人は拘束されてしまった。

教授は何か憑り付かれたかのように、遠い目で話をしはじめた。

「我が神は浄化を望んでおられる。人間達が幾多の苦しみから解放されるために。」

私は彼の腕となり、人々に死をもたらし、苦しみから解放してあげるのだ。」

カールは教授の変貌に混乱してしまった。だが、このまま黙っているわけにはいかない。

エレミアを超能力者と知っているカールは彼女の顔をじっと見つめる。

エレミアはカールの目線に気づき、心をテレパシーで感じ取った。

（ミアねえちゃん、僕が三秒数えたら、特殊な機械で

ロボットの動きを停止させるから、教授をなんとかして！

ヨハネくんにもそう伝えて！）

エレミアはカールにうなずき、ヨハネにもテレパシーで伝える。

三人は息を合わせた。カールは三秒数えだした。

（3・・・、

2・・・、

1・・・！）

カールは奥歯にくっつけていた超小型のスイッチを噛みしめた！

すると、カールのポケットから球体が飛び出してきて、空中に浮かび、

ロボットの動作を不安定にさせる電磁波を放った！

「な、なんだこれは?!」

教授が強力電磁波装置に目を取られている隙に、ヨハネは教授をおさえ込んだ。

教授のポケットから落ちた端末をエレミアが水の魔法でショートさせた。

カールは父親である教授に話をしたい所であったが、そんな状況ではない。

すぐさま、核ミサイル発射システムのプログラム改ざんを再開した。

それと伴い、マザーコンピューターの警報システムが鳴り出す。

『ミサイル 発射マデ 残り 10秒』

「だ、だめだ……このままじゃ間に合わない。」
無機質な声が響き渡る。

『ミサイル 発射マデ 残り 5秒』

もう無理か……。そう思った瞬間であった。外から猛獣の音が轟く。

グアアアアアーン!!

何かが近づいてくる。その物体はくちばしのようなもので、部屋に大きな穴を開けた。

ガッシャーーン!!

いくつかのモニターが激しく音を立てて割れる。

みんなは飛び散る破片がかからないように腕で顔を覆った。音のした方向をゆっくり見ると、ポツカリ空いた穴からは

巨大な鷹の顔がのぞいていてはないか！巨大な鷹はヨハネに話しかけた。

「ヨハネ、核ミサイルを止めることが出来るのはお前しかいねえぜ。」

早くオレの背中に乗るんだぜ。こい！」

ヨハネは啞然とする間も無いまま走っていった。

そのとき、ミサイルが発射されてしまった！

『ミサイル、発射！』

遠くからミサイルを発射する大きな音がする。

ヨハネは巨大な鷹の背中に乗った。ヨハネの無事を祈るエレミアとカール。

「お願い、ヨハネくん！核ミサイルを止めて！」

ヨハネは笑顔でうなずいた。巨大な鷹はヨハネに話しかけた。

「オレの名前はグリフォンだ。よろしくな。あの鉄の塊に追いつけるスピードを出すぜ。」

しっかりつかまってくれよ。じゃあ、いくぜえ〜？」

その言葉と同時に、巨大な美しい翼を羽ばたかせた。

一度の羽ばたきで、あたりはまるで台風の嵐の中にいるような感じだ。

瞬きする間もなく、ヨハネを乗せたグリフォンは飛んでいった。

空中。ヨハネを乗せたグリフォンは、光の速さのごとく、核ミサイルを追っている。

「よし、ミサイルが見えてきたぜ！」

核ミサイルの隣にグリフォンが追いついて並んだ。

核ミサイルの太さは直径6メートルくらいあるだろうか。グリフォンが話しかける。

「いいか、ヨハネ。こいつにはとんでもない量のプルトニウムが積まれている。」

被爆して内臓が破壊されるのは避けられないぜ。

地と水の宝玉を使って治癒の力を使いつつ、プルトニウムを取り出すんだ。

「さあ、いけっ！」

ヨハネは地と水の宝玉で七星剣を古代樹の剣に変化させ、剣の先から太いツルを生やし、核ミサイルの装甲に絡ませた。

猛烈なスピードでヨハネは飛ばされそうになったが、

頑丈な植物の根とツルのお陰で、なんとか核ミサイルにしがみ付くことが出来た。

核ミサイルは次第に植物に埋もれていき、小さなジャングルになった。

ヨハネは植物につかまりながら、プルトニウムがセットされているであろう、

ミサイルの先端付近へたどり着いた。

四苦八苦しなから剣で装甲をはがす。植物の根を装甲の隙間にもぐりこませ、

根を太らせて押し剥がした。

そこには怪しい緑色の物体が大きなガラス管の中で輝いていた。

その大きさはヨハネの背丈くらいである。慎重に抜き出すヨハネ。彼の手は放射能によって黒ずんでしまいが、七星剣の力でなんとか生命力を維持している。

プルトニウムのガラス管を抜き出せたヨハネは、

片手で抱えて再びグリフォンの背中に移る。

グリフォンは話しかけた。

「うまくいったな！しかし、そいつあ、ヤバイな。

守護神のオレでも、身が焼け焦げる痛みを感じるぜ……。」

「大丈夫かい？」

「へっ！心配するなよ！」

それより次だ。もうあの鉄くずは地表に落下しても爆発はしねえ。

そのプルトニウムを地層奥深くに埋め込むんだ。

火と地の宝玉を使って大地を割るといいぜ。」

そういうとグリフォンは人のいない荒れた大地にヨハネを連れて行った。

「よし、ここでいいだろう。さあ、ヨハネ、頼んだぜ！」

ヨハネは七星剣に火と地の宝玉をセットした。剣は溶岩が滴るマグマのように変化した。

マグマの熱気でグリフォンは目をそばめて言った。

「あちちち、あつい！早くしてくれ！たまん！」

ヨハネは七星剣を荒れ果てた大地に向かって振りかざした！

ゴゴゴゴゴゴ・・・！！

大地が震える・・・。

一本のひび割れが生じ、まるでヨハネに話しかけてくるかのような裂け方で

大地は深い、深い、大きな口を開いた。

ヨハネは空中から、プルトニウムが入ったガラス管を大地の口にそっと落とした。

プルトニウムは穴に吸い込まれるように落ちてゆく。

プルトニウムが目で見えなくなるまで落ちたとき、大地の口は静かに閉ざされた。

グリフォンは言った。

「これで一軒落着だな！ありがとな、ヨハネ！」

ヨハネは笑顔を見せた。その笑顔もつかの間、先ほどの放射能によるダメージが

ヨハネとグリフォンの体を蝕んでいた。ヨハネは咳き込んで血を吐いてしまった。

髪の毛も抜け落ちてゆく。

「ヨハネ！しっかりしろ！早く古代樹の剣に変えて、体を元にも

どすんだぜ！」

ヨハネは意識が朦朧とする中、七星剣を古代樹の剣に変え、神秘の力で体を元に戻した。

ケロツとするヨハネとグリフォン。

「ふう、助かったぜ。よし、今からオレの寢床へつれてってやる。

そこには、お前に渡す風の宝玉があるんだぜ。いくぜ！」

グリフォンはお構い無しに猛スピードで自分の巣に向かうのであった。

針のような山岳地帯。足場がなく、そこは決して人が登ってこられない、

寒くて空気の薄い場所だ。

山岳地帯の中心、大気圏に近い、山のとっぺんにグリフォンが住み着く寢床がある。

上を見上げると、宇宙に手が届きそうで怖いくらいだ。

寢床には神棚のようなものがあり、その中に風の宝玉が守られている。

グリフォンはヨハネを寢床に下ろした。

ヨハネは風の宝玉を手に入れた！

緑色をした綺麗な宝玉……。

覗き込めば、宝玉のなかに映る空へと、飛んでいってしまう感じがした。

グリフォンは話しかけた。

「すまなかつたぜ、ヨハネ。もっと早く会うべきだったぜ。」

ヨハネはグリフォンの顔を見た。

「これでお前が手にした宝玉は四つと言うわけか。

残るは光と闇、そして空。この三つは精神の宝玉ともいえるものだけ。

オレにも存在する場所がどこなのか分からないぜ。

だが、ヨハネ。お前になら必ず手にすることが出来るはずだぜ。

奇跡の旋風、時代の奏者たる風の宝玉、お前に託す。

なあくんで堅苦しいセリフ、オレには似合わねーぜ。ハッハッハ！

声高らかに笑うグリフォン。それにあわせてヨハネも笑う。

「よっしゃ、それじゃあ、仲間のもとへ送ってやるぜ！」

風の宝玉で空を飛べるが、オレ様のスピードには勝てねーぜ！

ハッハッハ！

ヨハネはグリフォンの背中に飛び乗った。

グリフォンは光の速さのごとく、エレミアたちのもとへ飛び去った。

そのころ、カールとエレミアは軍事施設のコマンドエリアの入り口に立っていた。

多くの軍人や警察が到着して、いろいろと事情聴取しているらしい。

カーフ教授は両手に手錠をかけられて、パトカーに搬送されるどころである。

カールは今でも泣きそうな顔で、教授に話しかけた。

「お父さん・・・、僕、お父さんが戻ってくるの待っているからね！」

僕は信じてるから・・・、やさしいお父さんって信じているから・・・！」

教授はうつろな目で口ずさんだ。

「カール・・・、お前も苦しみから解放してあげたかった・・・。」

警察官は教授をパトカーに押し乗せて、走っていった。

カールは耐え切れず、エレミアの胸の中で泣いた。

エレミアはやさしく抱きしめて、

「大丈夫・・・。きつとやさしいお父さんに戻って帰ってくるよ・・・。」とささやいた。

ちょうど、ヨハネは遠くから声をかけてくる。

「おい、エレミア、カール！」

「あ、ヨハネ！遅いったらもう！」

カールはヨハネに弱い自分を見せたくなかった。袖で涙をぬぐって笑顔で迎えた。

「ヨハネくん！無事だったんだね！」

グリフォンは静かに地上に着地した。周りにいた警察官や軍人は驚いていた。

「ありがとう、ヨハネくん。きみがいなければ、大変なことになっていたよ。」

「ううん。お礼をいうならグリフォンに言ってよ。」

「ありがとう、グリフォン！」

グリフォンは少し照れ気味で言った。

グオーーン、グオーーン！

カールにはグリフォンの言葉が分からなかった。エレミアが通訳してくれた。

「やめるよ、てれるじゃねーか！たいしたことねーぜ！だって

さー！」

「ハハハ！」

さっきまで悲しい気持ちで一杯だったカールの心は、いつの間にか楽しさに満たされていた。グリフォンが言った。

「カールという少年よ、ヨハネの力になってくれ！」

これから先、お前の力が必要になってくるぜ。」

「僕のロボットで世界が救えるなら、思いっきり手伝うよ！」

「ああ！頼んだぜ！それじゃあ、オレは帰るからな！また会おう！」

ヨハネたちは手を振ってグリフォンを見送った。

綺麗な夕日を背にして、グリフォンは雄々しく羽ばたいて帰って

い
つ
た
・
・
・
。

第五章 心

《第五章》心

一難去ったヨハネたちはアストラル大学の学生寮へ戻る事にした。カールは何かに警戒しているのか、あたりをキョロキョロ見回している。

その様子をエレミアは不思議に思い、問いかけた。

「カールくん、どうかしたの？おトイレに行きたいの？」

「しーっ……。違うよ。テレビ局が来ていないか気になって……。」

もうあんな体験はこりごりだからね……。」「

カールは以前、何度かテレビ局やラジオの取材の波に押し寄せられて、

苦しい思いをしたことがある。ゴキブリなみのしつこさにはうんざりしている。

カールが予想していた通り、二、三局のマスコミが軍事施設のゲートの前で

待ち構えているではないか。これでは先へ進むことが出来ない。

そう思ったカールたちは草むらの中に身を隠し、持っていた小型のパソコンで

ラグナロクを起動させ、遠隔操作を行った。

マスコミたちは轟くエンジン音のラグナロクに目がくぎづけになった。

「おおおー！あれはカール君が乗っているラグナロク！

よし、あれを追うぞ！中にカール君が搭乗しているはずだ！」

カールはラグナロクを遠いところまで走らせた。

マスコミが視界から消えたチャンスを見計らって、

カールたちは軍事施設をうまく抜け出した。

学生寮。カールは睡眠をとるため、研究室に戻ることにした。それもそのはず、ヨハネの七星剣を徹夜でグレードアップし、満足に寝てない彼の睡魔は極限を超えていた。

カールは二人に挨拶をして、寢床でもある自分の研究室へフラフラと帰っていった。

ヨハネとエレミアも疲れを取るため、眠ることにした。

「僕達も一休みしようか。」

「そうね。ものすごく疲れちゃった。お風呂に入るのが面倒なくらいだよ。」

二人は自分のベッドで沈むような感じで眠りについた。

ヨハネはまた夢を見ている……。

真つ暗な世界を見回す。すると、目の前に柔らかな光がポワッと灯り、

「見覚えのある男性が現れた。」

ヨハネの父親ウイリアムだ。

ウイリアムは笑顔を振りまくと、なぜか遠くに行ってしまう。

ヨハネは必死で走って追いかけようとするが、距離は縮まらない。ウイリアムの姿はだんだん薄くなり、とうとう追いつけずに消えてしまった。

その瞬間、ヨハネは夢から覚めた。シャツは汗でびっしょりになっていた。

時計を見てみると、どうやら、五時間くらい眠っていたようだ。

汗を流すため、お風呂に入ることにした。

服をぬいでバスルームの扉を開くと、

そこには暖かいシャワーを気持ちよく浴びる裸のエレミアが。

「キャアアアアアアア！」

エレミアはヨハネとは知らず、念導力で椅子や洗面器、シャンプー容器を思い切りぶつけてしまった！

パコーン！！

ヨハネは衝撃で気絶し、倒れてしまった……。

「ヘンターーイ！つて……、あれ……？ヨハネ？」

再びベッドで寝かされるヨハネであった。頭がズキズキする。

その痛みで目が覚める。目の前には顔を赤くしたエレミアが心配そうに見ていた。

「あいてて……。僕は一体……。」

「ご、ごめんね、ヨハネ。あんなことしてしまって。」

でも、ヨハネがいけないんだからね！ノックせずに行き成り入ってくるんだもん！

「ヘンタイおやじかと勘違いしちゃったじゃない。」

「ご、ごめん。これからは気をつけるよ。」

二人の間は少し気まずい雰囲気になった。ちよつどそこへカールが入り込んできた。

「ヨハネくん、ミアちゃん！」

エレミアはカールを思わず抱きしめた。

「カールくん、おはよう！もう疲れは取れた？」

「うん！それより聞いてよ！今からパーティーが始まるんだ！

一緒にいこうよ！きつと楽しいよ！」

「パーティーか！それは楽しみだね！支度をしたらすぐに行くよ。」

「うん！会場は中央庭園だよ。待ってるね！」

カールは走って一足先にパーティー会場へ向かった。

ヨハネとエレミアは支度をしてパーティー衣装を身にまとった。

「さすが貴族だね。とつても決まってるよ！」

「エレミアのほうこそ、綺麗だよ。」

二人は仲直りして、パーティ会場へ向かった。

中央庭園には色とりどりの植物が美しく咲いている。いくつものテーブルには豪華な食事が並んでいる。

ピラミッド型に積まれたシャンパングラスや、芸を披露するためのお立ち台などがある。

女性の院生がやってきた。露出度の高い赤いドレスを身にまとっていた。

ロボット襲撃時、地下シエルターの案内をしていた女の人だ。女院生は二人分のシャンパンを持ってきて、渡してくれた。

少し手前にオレンジジュースを飲んでいるカールを見つける。

ヨハネはカールに話しかけた。

「カール、おまたせ。」

「待つていたよ！ヨハネくん、かつこいいなあ！」

ヨハネの周りに学生が集まってきた。

ヨハネは多少、過去のいじめによる影響で押し寄せる人々に抵抗を感じたが、

「大丈夫」

と自分自身に言い聞かせた。

ヨハネはあつという間に学生達のアイドルになった。

愛嬌を振りまくヨハネ。

それを見るエレミアは自分の王子様が取られてしまうかのような嫉妬を感じてしまう。

学部長の挨拶が始まった。

「おほん。んゝ、学生諸君、ならびに職員の皆様、恐怖の中、ともに協力し合い、

そして無事に皆が生還できたことを心より喜び申し上げます。

この喜びを記念として、皆で乾杯をしたいと思います。

それではご唱和ください。カンパニー！」

会場にいるみんなの乾杯コールが大学の外まで響いた。

その後、お立ち台でマジシャンの手品やコーラス、ロボットのダンスなど、

いろんな芸でにぎわった。

ヨハネは少量の食べ物をお皿についでいた。その時である。ふと右に顔を向けると、父親ウイリアムがいるではないか。

ヨハネは盛り付けているトングをポロリと落としてしまった。父親は背を向けて何処かへ去っていかうとした。

ヨハネは後を追うため、手に持っていたお皿をテーブルの端に置いた。

それを見たエレミアとカールはヨハネを止めようとするが、何かにとり付かれているかのような目線で父親の方向を見続ける。

「ヨハネ！どこに行くの？」

「ヨハネくん、どうしたの?!」

二人の声がヨハネの耳に届かない。

父親の後を追いかけるため、走り出すヨハネ。

カールは呼び止めても、ヨハネは全く振り向く様子もない。

すかさずカールはポケットからホクロのような発信機を取り出して、

ヨハネの首に付着させた。

「これでヨハネ君はどこに行っても居場所が分かるけれど・・・。

一体、どうしたんだろう。ミアねえちゃん、僕は心配だから

ラグナロクを調整したあと、ヨハネ君の後をおつていくから、

ミアちゃんは先に追いかけてくれない？この追跡リーダー端末を貸してあげるよ。」

「うん、ありがとう、カールくん。じゃあわたし先に行っているからね。」

エレミアは私服に着替えた後、追跡リーダーをみながらヨハネの居場所を確かめて、

追いかけに行った。

一方、ヨハネは父親の後を追いかけるため、大学を出た。まわりの景色など一切目に入らず、父親のことだけに集中していたヨハネは、

いつの間にか空港にたどり着いていた。

父親は搭乗口まで差し掛かり、イタリアのローマ行き便に乗った。

ヨハネにはお金がなかったため、風の宝玉の力を利用して空を飛んだ。

父親の乗った飛行船が出発する。ヨハネは人に気づかれないように後を追って行った。

それをみながら、ようやく空港へたどり着いたエレミアは、手をひざに当てて息を切らしていた。

「ハア、ハア……。全くもう、いきなりどうしちゃったのよ。」

次の便まで三十分も空きがあるじゃない……。そこへタイミングよくカールがラグナロクに乗ってやってきた。

「ミアねえちゃん、おまたせ！ラグナロクの調整が終わったよ！のって！」

「カール君！ちょうどいいところに！」

エレミアはラグナロクに乗った。ラグナロクの足には反重力装置という

重力を操る装置で空を飛べるように改造されていた。

カールは機体内に内蔵されているレーダーを確認した。

「ヨハネ君はイタリアのローマに向かっているみたいだね。僕達も急ごうか。」

エレミアはうなずいた。

カールがモニターをタッチングして命令を送る。

ラグナロクの足首が縮まり、反重力装置が作動して、鉄の巨体が空中に浮かび上がる。

背中についたエンジンブースターから炎がふきだし、

ラグナロクは空を飛んでヨハネのもとへと向かっていった。

ヨハネは気持ちよく空を飛んでいる。真下にはフランスの街並みが見えてきた。

空港も近い。飛行船は着陸態勢に入った。

ヨハネは先に地上へ足をつけて飛行船から降りてくる父親を待っていた。

空港の到着アナウンスのあと、飛行船から乗客が次々へと流れっていく。

人が溢れかえっているその中で、ヨハネは目を見開いて父親を待っていた。

まだかまだかと焦りをみせていたその時、父親の姿が見えた。

父親は茶色のスーツ姿で、上半身は土ぼこりで

すこし茶色くそまつた白いシャツを着ていた。

いかにもダンディな考古学者といえよう。

ヨハネは先回りして父親に話しかけようと思っていたが、

多くの人ゴミにまみれてしまい、またもや逃してしまう。

息を詰まらせるような多くの人ごみ。

ヨハネは林の中の草木をかきわけるように人ゴミをかいくぐり、なんとか脱出した。

空港のタクシー乗り場へたどり着いた。

父親はタクシーに乗って、遠くへいつてしまった。

間に合わないと感じたヨハネは地面に座り込んでしまった。

その時、ようやくラグナロクに乗ったカールとエレミアが追いついた。

ヨハネはすぐさまラグナロクに乗ってカールに頼みごとをした。

「カール、あの車を追ってほしい。あのタクシーには僕の父さんが乗っているんだ！」

少し気が変わっていたヨハネにビックリしながらも、カールはヨ

ハネの頼みを

聞いてラグナロクを出発させる。

「わ、わかった！すっかりつかまって！いくよ！」

カールはヨハネからタクシーのナンバーを聞きだし、追跡レーダーに登録した。

空中からタクシーを追いかけけるラグナロク。

ローマの人々は派手に空を飛ぶラグナロクの存在に唾然としていた。

中には写真におさめて感激する人もいる。

追跡していたタクシーが停車したところには、キリスト教の大聖堂があった。

ラグナロクを地上に着陸させる。父親はタクシーから降りて大聖堂の中へ入っていく。

三人はその後を追いかける。

聖歌隊の歌声とともに礼拝堂が目の前に広がった。

ヨハネはエレミアとカールよりも早く歩いて父親に近づいた。

と をかたどった教壇の前までたどり着くと、父親の姿はスッと消え去ってしまった。

ヨハネは力が抜け落ちて膝間づいた。そこへ一人の美しい女性が姿を現した。

美しい女性は、手について膝間づいているヨハネの視線に合わせて座りこみ、話しかけてきた。

「貴方を待っていました。私はこの大聖堂の生神女、イヴと申します。」

「僕を・・・待っていた・・・？貴方は・・・。」

ヨハネは一瞬、夢の中で出会った女性と似ていると思った。

しかし、彼女から何も感じ取ることがなく、なにかが違っていた。イヴはヨハネに話しかけた。

「貴方は父親を追い求めて来たのですね。」

「なぜそれが、分かるのですか？」

「私は光の宝玉へと導く生神女です。あなたの心である光の宝玉が父親の魂を

呼び起こしたのでしよう。

いまから貴方の心から光の宝玉を引き出す儀式を行わなければなりません。

その前に、貴方へ真実を伝えなければなりません。」

「真実……？」

「はい……。心して聞いてください。決して己を悔やまないように……。」

イヴはヨハネの髪をなでながら、語り始めた。

「貴方の父親、ウイリアムは滅亡の使者を探求するため、私と司祭達とで古の都へ旅立ちました。

神殿の封印の間には貴方の持っている七星剣が封印されていました。

私達はその封印を解き放ち、ウイリアムは剣を手にしました。

しかし、暗黒の魔方陣から悪魔たちが出てきて、

ウイリアムに襲いかかってきたのです。

私達は聖なる力によって悪魔を撃退しましたが、

ウイリアムは深手を負ってしまいました。

彼は病院に行かず、この場所で、息子である貴方にこの七星剣を託すように、

遺言とカードを残して天国へ旅立たれました。

なくなられたのは貴方が十七歳の時である一年前のこと……。」

「そんな……父さんが……。」

ヨハネの心には今まで感じたことのない深い悲しみが押し寄せてきた。

こみ上げてくる感情。父親の顔を見ないまま、ずっと部屋にこもりきりであった自分の姿を思い起こす。

そのなかで、父親のそばにおれず、旅立たれたことにヨハネは嘆き悲しんだ。

幼きころの記憶が蘇ってくる……。

暖かい声、大きな背中、まぶしい笑顔、そして広い手のひら……。

魂でさえつかめず、もう、愛を感じることが出来ない……。

涙が溢れてくるヨハネ。イヴはヨハネに言った。

「貴方の父、ウイリアムは……、ヨハネ、あなたの心の中で永遠に生きていますよ。」

そして……、父の暖かい愛はあなた自身が持っています。

その愛を、こんどは貴方の愛する人へ伝えていけばいいのです。

┌

傍らで見守っているカールとエレミアもヨハネの悲しみを受け取って涙を流した。

ヨハネは七星剣を抱きしめて泣いている。

イヴの言葉を受け取ったヨハネは少しずつ父を失った苦しみから解放され、

やがて、涙は止まった。

うずくまっていたヨハネはまるで、花びらが開くかのように少しずつ、

姿勢を正していった。ヨハネは七星剣に語りかける。

「父さんは僕に世界を守って欲しかったんだね。」

だから、命をかけてこの剣を託してくれた。

僕は父さんの願いを叶えるために、絶対にここで立ち止まるわけにはいかない。

必ず、滅亡の使者を倒して見せるよ。」

「ヨハネ……、貴方は心がお強い方ですね……。」

ヨハネは立ち上がり、イヴに儀式を求め。

「イヴさん。僕は光の宝玉の儀式を受けます。」

「わかりました。それでは皆さん、こちらへ……。」
イヴは大聖堂の地下にある洞窟へみんなを案内した。

そこはヨハネが夢で見たあの祭壇へとつながる道であった。
夢でみたものが現実になったような感じである。

イヴは燭台のロウソクに火を灯した。

柔らかな明かりが辺りを包み、中央に銀色の杯が輝いている。

イヴは銀の杯を手に持ち、ヨハネに話しかける。

「ヨハネ、これを両手で持ってください。この杯は聖杯です。

聖杯にはまだ何も入っておりません。これから私が、十の質問をします。」

貴方はこの質問に答えてください。

貴方の素直な心によって、杯に聖水が満たされます。

それを飲んでください。

嘘偽りが一つでもあれば、それは毒になって貴方を苦しめるでしょう。」

「はい……。」

「それでは……、儀式を始めます。目をつむって……。」

ヨハネは両手で聖杯をもち、目を静かに閉じた。

エレミアは手を組んでヨハネの儀式が成功するように祈った。

一つ目の質問です。

貴方の親友は貴方にはない宝のような素質をもっています。

貴方はそれを自分の物にしたいと思えますか……？

二つ目の質問です。

貴方は孤独です。

親友に恋人が来ました。

親友は恋人に夢中で貴方に接することがなくなりました。

このとき……、貴方はどのような態度を取りますか？

三つ目の質問……。

街の皆から嫌われている、評判の悪い貴方の友達がいました。その友達が街の皆から偽りの罪によって責められています。貴方も、その輪の中にはいり、彼を責めますか……？

四つ目の質問です。

貴方はとてもおなかをすかせています。何か食べなければ死んでしまいます。誰もいない家のなか、かごに入った一つのリンゴがありました。貴方はそれを手にとって食べますか？

五つ目の質問です。

貴方には愛人がいます。その愛人との幸せに飽き、新しい恋人を探そうとしています。貴方の心は鏡にどう映っていますか？

六つ目の質問。

貴方の母親が何者かによって殺されました。貴方は怒りと悲しみをもって、その何者かを追及し、復讐しますか？

七つ目の質問です。

貴方の両親は、貴方に対してとても厳しく、

毎日、苦しい虐待を受けていました。
それでも貴方は両親を敬えますか？

八つ目の質問。

貴方は働きますか？

そこに、ライバルがいました。

雇い主は、一番仕事が出来た者に賃金を払うといました。
貴方はライバルに負けじと休みを取らず働き続けますか？

九つ目の質問です。

貴方は医者です。目の前には多くの人々が

難病で苦しんでいます。

貴方は神にすがり、祈りをささげますか・・・？

「はい。では・・・最後の質問です。

貴方は・・・神様の存在を信じますか・・・？」

最後の質問、ヨハネは少し間を空けた。

神の存在を信じ、生き続けることが果たして生きる希望につながるのだろうか。

神を信じて何かを成し遂げることが出来るのであろうか。

ヨハネは素直な自分を表した。

「僕は・・・、自分自身を信じたい・・・。」

「はい・・・。これで質問は終わりです。貴方を試みたことをお許しください。

さあ・・・、杯に入っている聖水を飲んでください。

貴方の純粋な気持ちによって、宝玉が答えてくださいます。」

固唾を呑んで見守るカールとエレミア。

ヨハネは恐る恐る、聖杯に口を近づけ、聖水をゆつくりと飲み始めた。

飲み終えた瞬間、ヨハネの心臓の辺りから真つ白い光が輝き始め、体から光の宝玉が抜け出した。ヨハネはその状態に驚いた。

エレミアとカールも身を乗り出すかのようにしてびっくりしている。

光の宝玉はフワフワと空中に浮かび、ヨハネはそれを手で掴んだ。イヴは笑顔で言った。

「私は信じていました。貴方が必ず光の宝玉を手にするこ

その無邪気で純粋な幼き心……、

貴方が成長しつづけ、歳を重ねていっても、

ずっと忘れずに……大切にしてくださいね。」

ヨハネは笑顔で答えた。

「はい。……イヴさん、有難うございました。」

イヴは微笑みで返した。

ヨハネはカールとエレミアの方を振り返り、光の宝玉を見せた。

カールは光の宝玉を見上げて言った。

「やったね、ヨハネくん！これで残るは闇と空の宝玉だね！」

「ああ。でもすまなかった……。カールたちの声も聞かずに勝

手に行ってしまうて。」

「ううん！気にしてないよ！」

エレミアは少し不機嫌そうだった。

しかしその顔の奥からは、普段のヨハネに戻ってよかったという安心をも表していたようだった。

「まったくもう……。本当に心配してたんだからね。でもよかった！」

エレミアの表情は笑顔になった。幸せに満ち溢れる時間。

暖かい光で包まれた空間のなか、喜び合う仲間達。

しばらくして、落ち着いた後、ヨハネはイヴに言った。

「イヴさん、本当に有難う。僕たちは次の宝玉を探すために、また旅立ち・・・に・・・」

様子がおかしい。みんなが固まっている・・・。

燭台のロウソクの火に揺らぎがない。まるで時間が止まっているようだ・・・。

ヨハネはあたりを見回したあと、イヴの目の前を手でかざしてみたら反応がない。

唯一、フワフワと浮遊している光の宝玉に目を移したその瞬間である！

「時は来たり・・・。」

どす黒い鈍い声が響いた。

その声とともに影が次第に闇の魔物のようになり、

ヨハネを残して全てのものを飲み込んでゆく。

あっという間に暗黒の世界に取り残されたヨハネ。

「これは一体・・・！？イヴさん！エレミア！カール！」

返事しても声は闇に吸い込まれてしまう。

「どういうことだ・・・。」

ヨハネはわけが分からなくなってきた。

静かなる闇のなか、再び、どす黒く鈍い声がささやき始めた。

「光は闇を生み、やがて光を生む。闇は光とともにありけり・・・。」

その瞬間、光の宝玉は天に浮かび上がり、純粋な潔白の色はやがて邪悪な漆黒へと

にじみだし、黒い宝玉に変化した。

そして、ヨハネの白い影は東西南北4つに伸びていき、

白い影はヨハネそのものを象った。

やがて白い影は宝玉の暗黒を浴びて、

北に伸びた影は青色に、東の影は緑に。西は茶色に、南は赤色に変化した。

それらの影は次第にすがた形がハッキリして行く。

ヨハネの影達は特徴のある鎧と宝玉で変化した七星剣を備えている。

赤の幻影、怒り狂う灼熱のごとく赤き火竜。

青の幻影、冷たき哀しみに溢れる海の巨獣。

茶の幻影、永遠の生命をもたらす白き蛇。

緑の幻影、雄々しい翼を持つ疾風の怪鳥。

それらはまさに、宝玉そのものであった。ヨハネの影達は攻撃態勢に入った。

どす黒い声のささやきが再びこだまする。

「ヨハネよ……。貴様の心ともいえる影と戦い、己に打ち勝つてみせよ……。」

ヨハネは真剣なまなざしになり、七星剣を構える。

宝玉を使おうと試みたが、今まで手に入れてきた宝玉が無くなっている。

「仕方ない……。なんとか乗り切らなければ……!」

4つの影はヨハネの周りをゆっくりと円を描くように歩き出した。
。。。

ヨハネがつばをのみこんだ……。

その瞬間！赤き影が背後から襲い掛かってきた！攻撃を剣で受け止める！

カキーン！

赤き影の立ちこめる怒りの波動が次第に強くなり、影の形相は白目をむいてエスカレートする。

さらに右から緑の影がジャンプ斬りで襲い掛かってくる！

ヨハネは緑の影の胸元を蹴り飛ばした！派手に吹っ飛んでいく。

ヨハネは赤の影の剣を弾き、腹部を剣で貫いた！

赤い血がほとばしる。赤い影はヨハネを睨み付けながら倒れている。
った。

しかし、全く痛みを感じていない様子。

ヨハネが赤い影に見とれている隙に、背後から茶の影が襲い掛かってくる。
ってきた。

茶の影の持っている古代樹の剣からは猛毒が噴出し、

ヨハネをめがけて貫こうとした！ヨハネは青の影の襟元を掴み、それを盾にした！

毒の刃が青の影の背中を貫いた！ヨハネは青と茶の影をまとめて蹴り飛ばした。

深手を負ったかに見えた影たちは、何事もなかったかのように立ち上がる。

再び、剣を構える影たち。

幾度も剣を交わし、ヨハネの体力は次第に奪われていく。

これ以上戦えない……。負けてしまう……。

そう考えているうちに全ての影が一齐に斬りかかってきた！

ヨハネは体を回転させ、剣で影の攻撃を跳ね退いて何とかしのいだ。
だ。

影たちはしりもちをついた。ヨハネの体はボロボロになりそうだった。
った。

一呼吸を置いて、ヨハネは剣を地面につき立て、目をつむって心に呼びかけた。

（このままでは一つも倒せずに我が身が先に滅んでしまう……。

永遠に戦い続けるのか……？僕はなぜ自分の感情と戦う必要があるんだろう。

・・・そうか。戦わなければいいんだ。自分の心を・・・受け入れるんだ・・・。）
影たちは立ち上がり、剣を構えて必殺技を繰り出すために力を溜めている！

ヨハネの汗がたらりと滴る・・・。
その汗が、暗黒の地面に落ちて音がなった瞬間、
影たちは必殺技でヨハネを斬りかけた！

不死鳥のように燃え上がる

『フェニックスストライク！』

極寒によりて全てを停止させる

『エターナルフリーズ！』

どんなものをも切り裂く

『ダイヤモンドファング！』

空間を切り裂き次元の狭間に葬る

『デイモンシヨンエッジ！』

全ての力がヨハネに襲い掛かる！！

・・・だが、ヨハネは微動だにしない。

影の攻撃は止まらない！その攻撃はヨハネに猛烈な勢いでぶつかった！！

眩い光が照らし出す！

やがて、光はおさまり、ヨハネの姿が見えてきた。ゆっくりと目を開く。

するとそこには、ヨハネの周りを四つの宝玉が浮かんでいた。
どす黒く鈍い声がする・・・。

「良くぞ見破った・・・。我が暗黒の試練、乗り越えし勇士よ。

真の悟りを開き、更なる道へ進むが良い。悟りとは己の意思で築くものぞ。

光あればこそこの闇。これを嫌い、滅することなかれ。否を恐れてはならない。

全てを受け入れた時、貴様はさらに強くなるであらう。」

そう告げると、天に昇っていた宝玉がヨハネの胸の高さまで降りてきた。

そして、宝玉は細胞が分裂するかのようになり、光と闇の宝玉に分かれた。

再び闇の声がヨハネを問う。

「貴様に一人の人間として問う。

このような暗黒のなか、将来が濃い霧で何度仰いでも希望が見えない状況であり、

大切なものは無残な枯れ木のように根絶やしにされ、

恐怖と絶望の沼に飲み込まれながら、もがき足掻いて苦しむ運命になろうとも、

貴様は生き続けたいか……？」

ヨハネは答えた。

「どんなに苦しみをうけても……、どんなに絶望を味わうことになるうとも……」

僕は何度でも立ち上がる。苦しんでいても生きている限り、希望はつくれる。

その希望は砂浜にある一粒の小さな砂のようであつても、

生きている時間がある限り、少しずつ大きくしていける。

希望を育てる事を生き甲斐として生きていけば、苦しいことなんて忘れられるさ！」

ヨハネの顔は希望に満ち溢れていた。

「ヨハネよ……。貴様の心は神聖な光よりも眩しい……。

貴様なら必ず滅亡の使者を討つことが出来るはずだ。」

さらに暗黒の声は語った。

「もう時間がない……。お前には今、世界の状況が見えてない。滅亡の使者が作り出した破滅の道具は次第に世界にばら撒かれ、人々は苦しみがいている。」

「そんな……。早くなんとかしなければ……。！」

「慌てるな。貴様に滅亡の使者の居場所を教えてやる。」

暗黒の聲が口を閉じた瞬間、地表が消えてヨハネは落下していった。

「うわぁー！ー！」

「落ち着け。これは幻想だ。……。さあ、見えてくるぞ……。暗黒の空間にたくさん星が輝き始め、少しずつ明るくなった。真下には青い地球が浮かんでいる。地球の引力によって吸い込まれていくヨハネ。」

次第に陸と海とがはっきり見えてきた。雲をかきわけ、どんどん落下してゆく。

やがて日本列島が見えてきた。

「滅亡の使者はこの日本の京都に存在してある。よく見るが良い。」

日本の街並みが見えてきた。街の建物は破壊されている。

ヨハネの落下は止まり、空中に漂った。

京都の中心に一際目立つ、高い塔が建っている。暗黒の聲はヨハネに語った。

「あの塔に滅亡の使者がいる。十二星座の塔……。」

かつて、何千年か前に古代人が建てた塔だ。

貴様の先祖が七星剣の力の一部である空の宝玉を封じ込めるため、

十二星座の塔をつくり、十二階にそれぞれ護りをおき、宝玉を封じた後、

塔そのものを深い地面の奥底に隠したのだ。

・・・だが、その十二星座の塔が滅亡の使者により浮上させられてしまった。

滅亡の使者は基地として改造し、そこに居座っておるようだ・

。。
なんとも憎たらしい・・・。

よし、ヨハネよ、さらに奴に近づいてみるぞ。」

再びヨハネは落下を始めた。十二星座の塔の最上階へ近づいた。落下がとまり、塔の壁を幽霊のようにすり抜けていく。その中には・・・。

「子供・・・?」

ヨハネは目を疑った。中学生くらいの男の子が背を向けて立っていた。

宙に浮かんでいるモニターで傍観している子供は、ヨハネの存在に気づいてないようだ。

暗黒の声が喋る。

「疑っているようだが、この少年が滅亡の使者だ。名前は安倍神一。」

彼が全てのモンスターやロボットを操り、人間をも洗脳して支配している。

普通の人間がなぜここまで出来たのかは私にも分からない。」

ヨハネは神一の顔を見るため、くると反対側へまわった。

頭の上には黄色い輪が浮かんでおり、背中には小さな羽がついている。

黄色と純白のシルクのローブ。髪の毛は金髪。神一はまるで天使そのものだった。

ヨハネはさらに神一との距離を人ひとり分くらい縮めて近寄った。神一の顔を眺めていた、その時！

ヨハネの存在に気づいたのであるうか、神一は視線をあわせた！
みるみるうちに天使のような顔が悪魔のように変貌した！

神一はヨハネに念力をかけた！酷い耳鳴りがしてきて、頭が割れ
そうな激痛が走る。

「ぐあつ！」

頭を押さえ込むヨハネ。

「いかん、空間を入れ替えるぞ！」

一瞬で目に見えていたビジョンが真っ暗になった。

「大丈夫か、ヨハネ。」

割れそうな頭痛は治まった。

「ハア、ハア、おさまった……。大丈夫。」

でも……。恐ろしい力を持つていることは分かった……。

「おそらく貴様一人では勝てる相手ではない。」

仲間であるエレミア、カールとともに、滅亡の使者、神一を倒

すのだ。良いな。」

「はい……。」

「伝えるべきものは全て伝えた。これから日本に渡るが良い。」

希望の星よ……。我々、生きとし生けるもの、全ての願いを

叶えたまえ。

私は常に貴様の闇の中に存在している。」

「あなたは……。一体誰なんですか……？」

「私は……。」

途絶える暗闇の声は薄れ、途中までしか聞こえなかった。

その瞬間、一筋の光が差し込み、やがて暗黒のカーテンは燃え盛
り、

目の前が真っ白になった。強烈な光で眩しくて目が開けられなく
なるヨハネ。

その光はゆっくりと和らいで行き、ようやく目を開けられる位に
なった。

目が慣れたころには、ヨハネは元の世界に戻っていた。

「イヴさん……。カール、エレミア……。」

ヨハネはポーっとしながら、皆の顔を見た。

エレミアはヨハネの様子が変だったのを気にして話しかけた。

「どーしたの？ポーっとして。嬉しくないの？」

カールはヨハネが手に持っている闇の宝玉に気づいた。

「あれ？ヨハネくんが手に持っているものって……。」

ヨハネの手にはいつの間にか闇の宝玉を掴んでいた。それをみたイヴは

「貴方が光の宝玉を手に入れたとき、力が解放されたお陰で闇の宝玉の力も

呼び起こされたのでしょね。」

ヨハネは滅亡の使者の正体をみんなに話した。エレミアとカールは驚いた。

「そんな奴がこの世界をメチャクチャにしているなんて……。」

「ぼく達の力で神一くんの野望を食い止めよう!」

「ああ!」

エレミアは難しい顔をして言った。

「でもヨハネ、ここから日本まではだいぶあるよ。」

「うーむ。」

カールは胸をたたいて自慢げに、

「そういうときは、ぼくにまかせてよ!」

「そうか、ラグナロクを使うのか!それで空を飛んで日本へ……。」

「ああんもう、ヨハネ、それじゃあ同じだってば。

どっちにしても時間がかかっちゃうよ。ヨハネって意外と頭が固いのね……。」

ヨハネは頬を人差し指でかいた。カールは笑いながら、説明を始めた。

「へへ。でも、ラグナロクを使うのは正解だよ！

今年開発を進めていたレポート機能を装着させて、

一気に日本へワープさせるのさ！すごいでしょ！」

「さすがカール、天才だな！」

「やだな、照れちゃうよ。」

「そうと分かれば、大学へ一直線ね！」

三人は手のひらでタッチし合った。イヴは微笑みを浮かべながら言った。

「とうとうこの日がやってきたんですね。

カール、エレミア、そして、ヨハネ。

力をあわせれば、どんな困難をも乗り越えられるはずです。

私は皆の無事を祈っております……。」

ヨハネは言った。

「イヴさん……。僕達は平和を取り戻し、必ず生きて帰ってきます。」

いろいろと……。ありがとうございました。」

「はい。ウィリアムも見守っておられることでしょう。頑張ってくださいね。」

「……。はい！それでは、行ってきます！」

そういうと三人はイヴに別れの挨拶をして大聖堂を後にした。

第六章 滅亡の使者

《第六章》 滅亡の使者

安倍神一。彼の出生はヨハネがこの世に誕生する十二年前にさかのぼる。

彼はごく普通の家庭に生まれ、一人っ子としてたくさんの愛情を受け、大切に育てられた。

神一が中学生になった頃、学校の生徒たちの圧迫により、彼は人に対する恐怖心を持ち出し、登校拒否を繰り返した。家で引きこもり、一日中テレビゲームで明け暮れる。

日に日にエスカレートし、とうとうご飯を食べなくなるほどのゲーム中毒に陥ってしまう。

ある日、神一は何か憑り付かれているかのように、徹夜でテレビゲームを遊んでいた。

熱中しているなか、トイレに行きたくなった。

一階のお手洗いへ行くため、階段を下りる。その時である。

神一は寝不足と疲労でふらつき、階段から足を踏み外し、頭から転がるように落ちてしまった。

激しい痛みによって気を失ってしまった。

眠っていた両親は、神一が階段から落ちた音に気がつき、飛び起きた。

駆けつけた母親は神一に一生懸命呼びかけるが返事はない。

父親はすぐさま119番に連絡した。

神一は病院に運ばれ、集中治療室で手術を受けた。体中は打撲だらけ。

骨にはヒビが入り、腕を骨折していた。頭を強打したため、頭蓋骨にもヒビが入っていた。

ドクターの懸命な治療により、命だけは取り留めることができた。しかし、ドクターの口からは二度と起き上がることの出来ない植物状態と

厳しい現実を両親に告げられた。

両親は泣き崩れ、神一の病室で共に一夜を過ごしたのだった。

翌日、両親は目覚め、神一にあいさつしようとした。

しかし、ベッドの上には神一の姿が消えていた。

酸素チューブや点滴の針が抜かされていた。

両親は心配してナースコールでドクターを呼んだ。

ドクターはすぐさま駆けつけてきて、動揺している両親の心を落ち着かせた。

あり得ない事実にはドクターは困惑する。虫の息であったにもかかわらず……。

その後、搜索依頼を出したものの、全く手がかりが見つからず、行方不明のまま、時が過ぎていった……。

時はもどり、荒れ果てた日本国。

襲い掛かるモンスターや戦闘ロボットによる被害はまるで、

戦争によって爆撃を受けたかのような焼け野原になっていた。

国民は自衛隊に救助される者もいれば、無残にも命を落としてしまつ者もいた。

悪魔の巣窟と化した京都のど真ん中には十二星座の塔がそびえ立っている。

神一がつくりだしたモンスターや戦闘ロボットはそこから湧き出ているようだ。

それを食い止めるため、日本政府は国民から選りすぐった人材を集め、精鋭の部隊を結成。

空からは戦闘機、陸からは戦車で何度も攻撃を試みるが、失敗に終わる。

軍人の中には神一^{カミイチ}の精神操作で操られ、反逆を行う者もあらわれた。

そんな混沌に渦巻く中、勇敢に戦う一つの陸軍部隊が存在した。黒色の軍服姿で赤い髪をなびかせながら、部下に指揮を執る女性がいる。

彼女は日本国陸軍大佐、^{エン}炎。

女性でありながら、男達よりも雄々しく、心身ともに強靱である。しかし、彼女の横顔からは、か弱い少女の面影も見えてくる。

エンは国民の安全を確保するため、一部のエリアにいるモンスターどもを

退治する作戦を開始した。三十名の部下は特注で作らせたレールガンや

バズーカなどの重火器を持ち、黒の防具で身を固めている。

作戦のエリアに到着したエンたちは待機する。

遠くからジワジワとモンスターや戦闘ロボットがやってきた。

エンは部下達に通信機で命令する。

「いいか？ 敵を限界まで寄せるんだ。私が射撃命令を下すまで、待機するんだぞ。」

動物を合成したモンスター、殺戮マシン、目玉に触手がついた気味の悪い生体などが無数に押し寄せてくる。

沈んでゆく夕日のオレンジ色と、降りてくる闇によって更なる恐怖感が部下達をせめる。

銃を持つ腕が震える。

モンスター達と部隊の距離が5メートル付近に縮まった瞬間、エンは射撃命令を下した！

まさか・・・」

「今は余計な事を考えるな！国民を護ることだけに集中しろ！」

「イエッサー！」

エンは自分のテントにもどり、休憩を取らずに新たな戦略を考えた。

机にランプを置き、緊張を解きほぐすために、束ねられた髪をとく。

丸められた地図を広げる。

あの大量のモンスターどもを押さえ込むにはどうしたらいいだろうか・・・。

考えているうちに15分が経過した。

命令どおり、五十名ほどの兵士達がテントの前に集結している。

エンはといていた長い髪の毛を再び結んで外にでた。

少佐が敬礼する。エンは兵士達に作戦を伝えた。

「よいか！これより十名をA班、残りをB班として分ける！」

B班はモンスターどもを陽動して時間を稼げ！

そのうちにA班は2エリア先の特殊戦車まで移動しろ！

戦車に乗り込んだらB班と合流するんだ！」

エンは兵士から十名を選び、A班として分けた。

「よし！作戦を開始する！」

掛け声と共に兵士たちは迅速に行動する。

エンは再びテントに戻り、武器を身につけ、B班のいるエリアへ向かおうとした。

その時、六十代くらいの夫婦が寄ってきて、エンに話しかけた。

「隊長さん・・・、うちの息子が心配です・・・。」

一緒に連れて行ってもらえないでしょうか・・・？」

エンは眉間にしわを寄せた。

「だめだ！危険すぎる。殺されてしまうぞ。あんた達はここにいな！」

母親は手を組んで願って言った。

「もう何年も帰って来ていないんです。危険なのは分かっています。」

でも、私達の命よりも大切なのです！死んでも探し出したい・

・！
」

エンは我が子に命を懸けている両親の絆に心を打たれた。

「その心、気に入ったよ。連れて行ってやるよ。」

「ただ、絶対私から離れるんじゃないよ。」

「有難うございます。」

エンと夫婦は軍用車両のダンプカーに乗ってB班の元へ向かった。ガレキの道を走る中、夫婦は息子がいないかあたりを何度も見回した。

B班のいるエリアに到着した。

兵士達はモンスターどもをなんとか押さえ込んでいる。

エンは車から降りた。班のリーダーが駆け寄って来て敬礼をする。

エンは戦況を聞いた。

「うまく押さえ込んでいるようだね。死傷者は？」

「今の所ゼロです！」

「武器の維持率は？」

「60%です！」

「そうか……。やはり人間の手では押さえ込みは困難か。ご苦労。」

報告が終わったリーダーは敬礼し、戦場に飛んでいった。

エンはイライラしながら「まだA班はこないのか！」と心の中でつぶやいたその時、

大きな戦車が五台到着した。A班のリーダーが降りて来た。エンは指揮をとる。

「よく聞きな。五台の戦車をウジムシどもに向けて一列並行させて待機するんだ。」

ずんぐりの戦車についているグラビティキャノン砲のエネルギーを充填させておけ。

それが完了したら私に連絡しろ！その後B班を撤退させる。

撤退完了したら私が砲撃命令を出すから、あのウヅムシに向かってぶちまける！」

「イエッサー！」

リーダーは戦車に乗り込み、命令どおりに並ばせた。

五台の戦車のグラビティキャノンにエネルギー充填を開始する。次第にエネルギー充填の音が強まる。

10%・・・、

50%・・・、

100%。

エンの通信機からリーダーの声がする。

『充填が完了しました！』

「わかった！ではB班を撤退させる。待機しておけ！」

エンは通信を切り替えた。

ススや泥まみれになりながらも懸命に戦っている兵士達。

イヤホンマイクからエンの撤退命令が流れる。

瞬きをするうちに戦場から兵士の姿が消え去った。

エンはすかさず砲撃命令を下した！

「いまだ！ぶっ放せ！！！」

一斉に戦車のグラビティキャノン砲から黒い重力弾が、

湧き上がるモンスター群へ向けて発射された！

鈍く重い音がこだまする。

弾はモンスターや、あの頑丈な戦闘マシンを次から次へとすり潰していく！

そのダメージは計り知れない。

モンスターどもは一枚の紙のように薄っぺらになっていった。

これにより、何千、何万のモンスター達を倒したが、湧き寄ってくる力は衰えを知らない。

重力弾の速度は次第に落ちてきて、ピタツと止まってしまった。だが、重力弾は空中で漂い、膨張を始めた。何十メートルにも膨張し続ける弾は、押しつぶす強い力によって地面は円状にへこんでいった。重力弾につかまったモンスター達は吸い込まれていき、米粒ほどの小さい物質へと押し潰された。やがて、重力弾は爆発と共に消え去った。

押し寄せてきていたモンスター群の波はおさまり、勢いは止まった。

双眼鏡で遠くを確認するエン。作戦が成功した喜びに初めて微笑を浮かべる。

背後にいる兵士達に喜びを分かち合おうと振り向いた。

その瞬間……、エンの背後に神一が不気味な笑みを浮かべながら、姿を現した。

神一はエンの背中におぶさる感じで寄りかかってささやいた。

「おめでとう……。」

エンは神一を振り飛ばして持っているレーザーガンで打ち抜きたいところだが、

体が思うように動かない。声も全く出せない状況。

神一はさらに言った。

「せつかく死の楽園につれて行ってあげようと思ったのに……。」

どうして人間って苦しみを好むんだろうね……。ふふふ……。

せつかく来たんだ。僕からのプレゼントをしてあげるよ。」

そういうと、神一は超能力で兵士達の体を自在に操りだした。

エンの頬に一筋の汗がたれる。

「か、体が勝手に……！助けて……！大佐あー！」

エンの目の前で、兵士たちはナイフや銃を手に取り、互いに殺しあった……。

やがて兵士たちは、一人残らず全滅してしまった。

神一は喜んだ。

「よかった……。これでもうこの人たちは苦しまずにすむね……。」

キミも、天国にいった人たちの場所へ送ってあげるよ……。」「
そういうと、神一はエンの首を締めだした。苦しなくても瞬きすら
出来ないエン。

（私はここで死ぬわけにはいかない……。！）

護らなければならぬ人々がいる！舐めるなよ！）

エンは心の中で叫んだ。そのお陰か、神一の超能力による束縛が
解けた！

素早く神一の手を掴み、一本背負いで地面に叩きつけた！

エンはレーザーガンを取り出し、何もためらいもなく神一に説教
しながらレーザーを放った！

「この世に天国や地獄など無いんだよ！

あるのは人間の世界だけだ！」

だが……。命中したはずの神一の体には傷一つ付いていない。

神一は笑った。

「ははは。僕を殺せるとでも思っていたのかい？」

「クツ……。！」

エンは何度もレーザーガンを撃ち込むが、弾は神一の体を突き通
っていった。

神一は立ち上がり、サイコキネシスで何トンもある、五台の戦車
を持ち上げた。

「僕の金縛りをといたことだけは褒めてあげるよ。

でももう、粹がる必要はないんだよ。これで終わりだ。さよう
なら。」

そういうと、エンの頭上何メートルからか、五台の戦車を積み重
ねるように落下させた！

真上に顔を向ける。こればかりはもうダメかと思った。

まるでスローモーションがかかったかのような遅い時間。
心の中で死んでしまった兵士達にすまないと謝る。
絶体絶命か。

車体がエンの鼻先につきそうな距離まで落下した瞬間であった。
遠くから光がやってきて、エンを包み込む。

光はエンをその場から安全なところへ移動した。

ズドーーーーーン!!!

五台の戦車は積み重なるように地面へ激突した。

その衝撃と音はまるで雷が落ちたかのようにであった。

エンを包んでいた光はやがて弱まり、光の正体が見えてきた。ヨハネだ！

お姫様抱っこをされているエンはポカーンと口をあけてヨハネの顔を見ている。

「大丈夫かい？」

エンは照れて、みずから地面に降り立った。

「た、助かった。ありがとう。」

そんな和やかなムードもつかの間、神一の攻撃が続いてくる！

神一はサイコキネシスで、軍用車両に積まれてあった大量の重火器を操り、

ヨハネとエンに銃口を向けた。

神一が手を振りかざした瞬間、すべての重火器が一斉に火を噴いた！

そこへ颯爽とあらわれるラグナロク！ヨハネとエンの盾となる！

「へっへーん！そんな豆鉄砲なんか消し飛ばしてやる〜！」

カールは新たに開発した大型のレーザーキャノンで、襲い掛かる全ての弾を蒸発させた！神一は思うように行かず、少しライラしている。

休むことなく神一は超音波を発し、ヨハネたちの脳を攻撃する。

耳をつんざき、頭がひび割れるほど痛みを感じる。そこへ、元氣な女の子の音がする。

「お姫様抱っこなんてずるい！まだ私はされたことないのに！」
そういいながら、エレミアがやってきた！

エレミアは神一の超音波を中和する波動を繰り出した！

超音波がかき消される。

「なに……？僕の超音波がかき消されたけど……？人間の分際で……！」

神一は身を引き、ヨハネたちと距離を置いた。

両者ともにらみ合う。

そのなか、エンが乗ってきたダンプカーから夫婦が降りてきた。

ヨハネたちの戦闘による、凄まじい音につられ、不安で身を縮めながらやって来た。

夫婦は神一の姿を見て思わず声をかけた。

「……しんちゃん？しんちゃんだわ！」

「神一……！ずっと探していたぞ！よかった……無事でいてくれて！」

神一は両親の顔を見ると、両親の感情が心の中に入り込み、意識が飛んだ。

うつ状態になりそうなくらいの吐き気を催した。瞳孔が開き、口を手で押さえる。

「ウツ……。」

神一にとって愛は苦痛そのものである。

このままでは耐え切れないと判断した神一は憎しみに満ちた顔つきで言葉を残し、

体が次第に透明になって行き、消えてゆく。

「ぐう……、どいつもこいつも神である僕に齒向かいやがって……！」

このままで済むと思うなよ……。苦しみの動物め……。裁きを下してやる……！」

エンが呼び止める。

「まで!!!……くそつ、逃げられたか……。」

神一の姿は消えてしまった……。

再び我が子を見失った母親は希望の芽を摘まれたかのような絶望感を味わい、

神一の名前を呼びかけ続けた。

だが、父親はなぜか恐怖のあまりに身震いを起こし、頭を抱えている。

緊迫のムードの中から解放されたヨハネたちは、張り詰めた心を振りほどく。

エンはヨハネに握手をしながら、自己紹介した。

「危ないところを助けてもらった。」

心より感謝する！私の名は炎と書いてエンという。よろしく！」

「ご無事で何よりです。僕はヨハネといいます。こっちの女の子がエレミア、」

男の子はカールといます。みんな大切な僕の友達です。」

「そうか！よろしくな！」

エンはエレミアに握手を交わす。

エレミアはお姫様抱っここのことをまだ引きずっており、不機嫌そうな顔をしながら挨拶を交わした。

カールはエンの強いオーラを感じ、少し恐怖心を抱きながらも握手をした。

「……よ、よろしく、おばさん。」

ヨハネとエレミアは「おばさん」と言う言葉が耳に入った瞬間、身が凍った。

エレミアはカールに「おねえさんでしょ！」と、小声でつぶやいた。

それを聞いたエンは、高らかに鼻でわらった。

「ハハハ。おばさんか！ちっこい割には度胸あるね！気に入った

よ！」
場の空気は和やかになり、皆が落ち着きを取り戻した。
しかし、神一の両親の心は不安定のままだった。

ヨハネは父親の強張った表情を見て、様子を伺うため、声をかけた。

「大丈夫ですか・・・？」

神一の父親はヨハネに目を合わせ、声を震わせながら気持ちを伝えた。

「あいつは・・・神一じゃない・・・。」

それを聞いた母親は父親の言葉を否定した。

「何言っているのよ、お父さん・・・！間違いないわ！しんちゃんよ！」

母親の叫び声で皆の視線は両親の方に移った。父親は言い返した。
「違う・・・、神一じゃない。確かに神一だが・・・、よく考えてみる。」

俺たちはとうに六十歳を超えているんだぞ。

神一が生き続けているならば、あいつはもう三十歳を過ぎていくはずだ・・・。

なのに、体は中学生のころの若いままだったじゃないか！」

「そんな・・・、だったら・・・あのしんちゃんは一切何だったの・・・？」

「わからない・・・。」

冷たい空気が流れこむ。二人が神一の両親だと察したヨハネは、砂をかむような思いで両親に事実を話した。

「あの子は紛れも無く、神一君です。彼はこの世界の生きとし生けるもの、

全ての苦しみを解放するために世界を滅ぼそうとしています。

なぜ、彼の姿が幼いままだったのか、世界を滅ぼすまでの力を得ることができたのかは僕にも分かりません・・・。」

母親は気を失いそうになり、フラついたところを父親が受け止め、座り込む。

父親は神一のことを心配して、ヨハネに頼み込んだ。

「どうか・・・、神一を助け出してくれませんか？

たつた一人の息子なんです。

長い年月、どんなことをしても捜し出せなかった・・・。

でも生きていてくれた・・・。

私は神一のことを疑っています、それでもやっぱり、

大切な息子に過ぎません。神一がいてくれるだけで、

私達は幸せなんです。希望の星なんです。

お願いします・・・。」

ヨハネは苦悩した。出来ることならば神一を助けたい。

だが、彼は人としての心を取り戻してくれるだろうか。

そんな迷いとは裏腹に、ヨハネには強い意志があった。

多くの犠牲を生み出した、滅亡の使者である神一を絶対に許すわけにはいかない。

宝玉の守護神たちに託された願い、七星剣から伝わってくる父の思い。

この世を守る使命のため、倒さなければならぬ・・・。

神一の父親にどう言うべきか・・・。ヨハネは迷いを解き、静かに口をひらいた。

「僕たちが神一君を助け出します。

ですが、どのような呼びかけをしても彼が邪悪な心から

解放されないのであれば、僕は彼を倒します。」

母親はそれを聞いて口も開けない疲労感に襲われながら、心の中で「神一を殺さないで」と強く念じた。

それに気がつく父親は母親の顔を見つめた後、ヨハネの方に振り向いた。

「どうか、神一の苦しみを解き放ってください。

誰よりも苦しみを感じているのは彼自身だと思えます。

どうか、神一をよろしくお願いします……。」

ヨハネたちは両親の意思を強く受け止め、うなずいて返事をした。

暗黒の夜空に不気味と輝く十二星座の塔。

ヨハネたちは顔を見合わせて呼吸を整えた。

ヨハネはいよいよ、この時が来たと言わんばかりに塔を指し示して言った。

「みんな、あの塔の最上階に神一くんがいる。

そこには僕の求めている『空の宝玉』もあるという。

おそらく、そこが最後の戦いの場になるだろう。みんな、がんばろう！」

エレミアとカールは元気よく「オー！」掛け声を上げた。

エンがヨハネに近寄って、話しかけた。

「私もついて行かせておくれ。この世界を守る義務がある。

それに、お前に助けてもらった借りもあるしな。」

ヨハネは笑顔で返事をした。

「助かります。ともに戦いましょう！」

一呼吸おいた後、エンはヨハネに話しかけた。

「意気込みはいいが、塔に出発するのは夜が明けたほうがいい。

暗闇によつて敵の罠にはまる危険性がある。今日はゆっくり休まないか？」

食い物なら私のダンプに積んである。

テントから何までそろっているから、心配ご無用だぞ。」

「それは助かります。そうですね、お腹もすいた事だし、一休みしましょうか。」

エンは十六畳分もの広さのあるテントを建てた。

一つのボタンを押せば、一瞬にしてテントが張れる便利な機構になっている。

次に食事の準備に取り掛かった。みんなはキャンプ気分で楽しく

準備を始める。

荒れた地面をならしてテーブルをおき、

エレミアが持っていた花柄のナプキンをそっと広げた。

軍用の非常食がお皿に盛り付けられ、テーブルの上に並んだ。

質素で単色な非常食たちも、食べ物が組み合わせられると豪華なデザート

イナーに早変わり。

ヨハネは神一の両親も食事に誘った。

「いただきまーす！」

みんなの明るい声で食事が始まった。

ヨハネとエンは会話で盛り上がり、エレミアとカールは食事に夢中。

神一の両親もみんなの暖かい心によって落ち着きを取り戻したようだ。

あつという間に楽しい食事の時間が終わり、後片付けを済ませた後、

みんなは寝る準備をした。エンは外で枯れ木にハンモックをかけて寝ることにした。

エレミアは「外で寝ると風邪を引いちゃうよ。」と心配するが、

エンは、「敵が襲ってきてもすぐに行動できるように、見張りも兼ねている。」と

エレミアに説明した。

神一の両親とカールは熟睡しており、ヨハネとエレミアは一緒にうつぶせの状態で、

テントの窓から外のきれいな星空を眺めている。

「見て、ヨハネ。お星様がキレイだね。」

「ほんとだな。戦っていた時は全く気がつかなかったのに……」

キレイな星空は僕達の心なのかもしれないね。」

エレミアはヨハネと始めて出遭ったころを話し出した。

「わたしね、魔術学校のアイドルとして有名だったの。

そのせいで、友達やパパやママでさえも、

まるで見世物小屋の動物のように扱われたの。

私を人間として接してくれなかった。

とてもイヤで仕方が無くって家出していたの。

途方にくれて、死んじやおうかと思ったこともあった。

でもね、ヨハネと始めて出遭ったとき、私の居場所は

ここにあるんだなってすごく感じて、心が落ち着いたの。」

「そうだったんだ……。そんな辛いことがあったなんて……。」

「

「ヨハネ……。この戦いが終わっても……。ずっと一緒にいてくれる?」

ヨハネは微笑んで「ああ、一緒だよ。」と答え、やさしく抱きしめた。

「ありがとう……。とっても嬉しいよ。」とエレミアは幸せでいっぱいになった。

次の日、まぶしい朝日がエンの目を覚ました。

「もう……。朝か……。」

エンは髪をとき始めた。美しく流れる紅い髪は朝日によってキラキラと輝く。

神一に殺された仲間や家族の事を思い、切ない表情で遠くを見つめる。

エンは弱い自分を抑えるために心を入れ替え、髪をまとめた。

顔を洗ったあと、眠っている皆を起こすため、テントに向かった。テントの前にはヨハネが既に起きていた。ヨハネはエンに挨拶した。

た。

「お早う、エンさん。いよいよですね!」

「おはよう。そうだな。ようやく決着がつけられそうだ。」

二人はみんなを起こし、出発の準備をはじめた。

カールはラグナロクのメンテナンスを手早く済ませ、新たに作り上げたロボットを詰め込んだ。

エレミアは化粧して身なりを整えた。

みんなの準備が整ったことを確認したヨハネは、

「出発だ！」と元気よく声をかけた。

みんなは一斉に拳をあげて「おー！」と掛け声を合わせた。

太陽はヨハネたちを応援するように顔をのぞかせて見守っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2779z/>

星の使徒 ~ヨハネの大冒険~

2011年12月9日23時51分発行